

富山県魚津市

市内遺跡発掘調査報告

—国道8号入善黒部バイパス建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告—

平伝寺東遺跡 浜経田遺跡 仏田遺跡 江口遺跡

2014年

魚津市教育委員会

序

魚津市教育委員会では、国道8号入善黒部バイパス建設事業に伴いまして、国土交通省富山河川国道事務所から委託を受け、平成19年度より計画路線内における埋蔵文化財包蔵地について、遺跡の範囲等の確認調査を実施しました。

本書は、平伝寺地区から江口地区までの計画路線内に所在する平伝寺東遺跡、浜経田遺跡、仏田遺跡、江口遺跡の調査結果をまとめたものです。

調査の結果、従来、遺跡の空白地帯であった仏田地区と江口地区で、奈良～平安時代を中心とする遺跡が地下に眠っていることが判明しました。この確認調査の成果をもとに、仏田遺跡と江口遺跡では、貴重な埋蔵文化財について、記録保存を目的とした発掘調査を実施することになりました。

この確認調査の成果が、私たちの共有財産である埋蔵文化財と地域の歴史研究に対する理解に役立てば幸いです。

最後に、今回の調査の実施にあたりまして格別のご協力とご配慮をいただきました各調査地区の方々や関係機関に厚く御礼申し上げます。

平成26年3月

魚津市教育委員会
教育長 長島 潔

例言

- 1 本書は富山県魚津市内に所在する平伝寺東遺跡、浜経田遺跡、仏田遺跡、江口遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は、国土交通省富山河川国道事務所が事業主体となる国道8号入善黒部バイパス建設事業に伴うもので、国土交通省富山河川国道事務所の委託を受けて、平成19年度から平成23年度にかけて魚津市教育委員会が実施した。
- 3 調査事務局は魚津市教育委員会生涯学習・スポーツ課(生涯学習課)に置き、文化係が調査事務を担当、生涯学習・スポーツ課長が総括した。
- 4 本書の執筆は、小川幹太(株式会社太陽測地社)との場が担当し、編集は的場が行った。
- 5 発掘調査対象地、現地調査期間、調査対象面積等は本文中を参照されたい。
- 6 調査にあたっては、座標系は旧日本測地系とし、水平基準は標高(海拔高)を示す。
- 7 遺物実測図の縮尺は3分の1を基本とするが、大型の木製品のみ6分の1とした。
- 8 本書で用いた土色の色調は、小山正忠・竹原秀雄著『新版標準土色帖』(1997)に準拠している。
- 9 出土遺物の番号は実測図、写真図版の遺物番号にそれぞれ対応している。
- 10 出土遺物及び発掘調査の記録資料(図面・写真等)はすべて魚津市教育委員会が保管している。
- 11 発掘調査に際しては、関係各機関、地権者の方々をはじめ、多くの方々のご理解とご協力をいただいた。

目次

第1章 位置と環境	1
第2章 調査に至る経緯	2
第3章 調査の概要	3
第1節 平伝寺東遺跡	3
第2節 浜経田遺跡	7
第3節 仏田遺跡	12
第4節 江口遺跡	23
第4章 まとめ	28

挿図目次

第1図	遺跡位置図(縮尺 1:40,000)	1
第2図	平伝寺東遺跡の調査範囲(縮尺 1:1,200)	4
第3図	平伝寺東遺跡トレンチ配置図(縮尺 1:800)	5
第4図	平伝寺東遺跡土層断面図(縮尺 1:40)	6
第5図	平伝寺東遺跡出土遺物実測図(縮尺 1:3)	7
第6図	浜経田遺跡の調査範囲と調査区の設定(縮尺 1:2,000)	8
第7図	浜経田遺跡トレンチ配置図(縮尺 1:1,200)	9
第8図	浜経田遺跡土層断面図1(縮尺 1:40)	10
第9図	浜経田遺跡土層断面図2(縮尺 1:40)	11
第10図	浜経田遺跡出土遺物実測図(縮尺 1:3, 1:6)	12
第11図	仏田遺跡の調査範囲(縮尺 1:3,000)	13
第12図	仏田遺跡トレンチ配置図(縮尺 1:2,000)	14
第13図	仏田遺跡遺構検出図(縮尺 1:1,200)	15
第14図	仏田遺跡本発掘調査範囲(縮尺 1:3,000)	16
第15図	仏田遺跡調査対象地の土層縦断図(縮尺 1:3,000)	17
第16図	仏田遺跡出土遺物実測図1(縮尺 1:3)	19
第17図	仏田遺跡出土遺物実測図2(縮尺 1:3)	21
第18図	仏田遺跡出土遺物実測図3(縮尺 1:3)	22
第19図	江口遺跡の調査範囲(縮尺 1:2,000)	23
第20図	江口遺跡本発掘調査範囲(縮尺 1:2,000)	24
第21図	江口遺跡トレンチ配置図(縮尺 1:1,000)	25
第22図	江口遺跡遺構検出図(縮尺 1:600)	26
第23図	江口遺跡出土遺物実測図(縮尺 1:3)	27

表目次

第1表	入善黒部バイパス建設に伴う埋蔵文化財調査一覧	2
-----	------------------------------	---

写真図版目次

図版 1	平伝寺東遺跡トレンチ 1	図版 12	仏田遺跡トレンチ 7
図版 2	平伝寺東遺跡トレンチ 2	図版 13	仏田遺跡トレンチ 8
図版 3	浜経田遺跡トレンチ 1	図版 14	江口遺跡トレンチ 1
図版 4	浜経田遺跡トレンチ 2	図版 15	江口遺跡トレンチ 2
図版 5	浜経田遺跡トレンチ 3	図版 16	江口遺跡トレンチ 3
図版 6	仏田遺跡トレンチ 1	図版 17	江口遺跡トレンチ 4
図版 7	仏田遺跡トレンチ 2	図版 18	平伝寺東遺跡
図版 8	仏田遺跡トレンチ 3		浜経田遺跡出土遺物
図版 9	仏田遺跡トレンチ 4	図版 19	仏田遺跡出土遺物 1
図版 10	仏田遺跡トレンチ 5	図版 20	仏田遺跡出土遺物 2
図版 11	仏田遺跡トレンチ 6	図版 21	江口遺跡出土遺物

第1章 位置と環境

魚津市は、富山平野の北東部に位置し、面積約200km²、人口4万4千弱を数える。市内には北から順に、布施川、片貝川、角川、早月川の主要な4河川が流れている。北側の黒部市との境をなす布施川、毛勝山(標高2,414m)や僧ヶ岳(1,855m)を源流とする片貝川、大平山周辺に源流をもつ角川、南側の滑川市との境をなす早月川が市域を貫流し、日本海へと注いでいる。片貝川や早月川は、源流から海へ至るまでの高度差に対し、流路延長が短いことから県内でも有数の急流河川として知られている。

魚津市の地形は、立山連峰の一部である毛勝山や僧ヶ岳などの山岳地帯とその前山をなす丘陵地帯、平野部の扇状地で大部分が構成されている。山地から流れる急流河川は深い谷を形成しながら多くの土砂を運び、山地を抜けたところで扇状地を形成する。市の平野部のうち、半分以上は片貝川の扇状地である。さらに扇状地上を流れる河川の両側には河岸段丘が顯著に発達し、数段の段丘面が見られる。市内の遺跡の多くは、この河岸段丘の発達した洪積台地上や段丘が沖積地に埋没するあたりで確認することができる。

今回、調査を実施した平伝寺東遺跡、浜経田遺跡、仏田遺跡、江口遺跡は、片貝川左岸に位置し、同河川が形成した扇状地上に立地する。現在は、圃場整備等で地形の整備が進んでいるが、旧地形に照らし合させてみると、平伝寺東遺跡を除く3遺跡では、谷と谷の間にある微高地に立地していることがわかる。特に今回、良好に遺跡の存在が確認された仏田遺跡と江口遺跡は、北陸街道沿いにある遺跡であり、その関連性も含めて興味深い遺跡である。



第1図 遺跡位置図(縮尺1:40,000)

204115 平伝寺東遺跡 204116 浜経田遺跡 204117 仏田遺跡 204118 江口遺跡

第2章 調査に至る経緯

国道8号入善黒部バイパス建設予定地の埋蔵文化財の取り扱いについて、国土交通省富山河川国道事務所より照会があり、これに対して、計画路線内の埋蔵文化財の分布状況を把握するため、平成16年3月に富山県教育委員会が調査主体となって建設予定地内の埋蔵文化財の有無及びその範囲を確認するための分布調査を実施した。魚津市内の建設予定地では、これまで未踏査であった片貝川左岸の魚津市江口地内～平伝寺地内にかけての計画路線内及びその周辺の踏査を実施した。魚津市域の調査は距離2km、面積約25haであった。この調査で平伝寺地内、浜経田地内、仏田地内、江口地内において遺跡が確認された。新発見の遺跡の名称は入善黒部バイパス(Nyuzen Kurobe Bypass)の略NKBをそれぞれに冠し、平伝寺地内の遺跡をNKB-6遺跡、浜経田地内の遺跡をNKB-7遺跡、仏田地内の遺跡をNKB-8遺跡、江口地内の遺跡をNKB-9遺跡と仮称した。この分布調査を基に、遺跡台帳にはNKB-6遺跡を平伝寺東遺跡、NKB-7遺跡を浜経田遺跡、NKB-8遺跡を仏田遺跡、NKB-9遺跡を江口遺跡として登録した。分布調査により確認された新遺跡のバイパス建設予定地内における埋蔵文化財について、平成19年度以降、順次、遺跡の有無を確認するための調査を実施した。調査にあたっては、用地買収が完了した箇所から隨時行うこととしたため、同一遺跡内においても複数回の調査を実施することとなった。なお、確認調査は平成23年度までの5ヶ年で終了した。各遺跡の調査対象面積及び掘削面積等は以下のとおりである。

第1表 入善黒部バイパス建設に伴う埋蔵文化財調査一覧

遺跡名	調査対象面積(m ²)	掘削面積(m ²)	調査年度
平伝寺東遺跡	11,039	1,072	平成20～22年度
浜経田遺跡	21,850	1,268	平成20～22年度
仏田遺跡	35,213	2,680	平成19年度
江口遺跡	7,177	733	平成21～23年度
合計	75,279	5,753	

第3章 調査の概要

第1節 平伝寺東遺跡

(1) 現地調査の方法と発掘面積

現地調査は0.25m²のバックホウ(標準バケット)による機械掘削及び人力掘削により、トレンチ内を耕作土ないし盛土から地山と考えられる黄橙色系の砂礫層まで掘り下げ、遺構・遺物の遺存状況を確認した。トレンチは現在の水田区割りに沿って設定し、「L」、「T」、「E」字状となるように設定した。平伝寺東遺跡は平成20～22年度に現地調査を実施し、3ヶ年の調査対象面積は合計11,039m²(平成20年度6,500m²、平成21年度1,752m²、平成22年度2,787m²)、総調査面積1,072m²(平成20年度648m²、平成21年度191m²、平成22年度233m²)、合計トレンチ本数35本(平成20年度22本、平成21年度7本、平成22年度6本)である。調査面積は調査対象面積の約9.7%にあたる。

図面は「平成15年度入善黒部B P 黒部市域測量作業」成果を基に、現地に配点された基準点・水準点、もしくはそれらをもとに新設した基準点・水準点を使用して作成した。平面図はトータルステーションによる放射観測により作成し、土壟断面図は手実測とトータルステーションによる放射観測を併用して作成した。なお、平面座標値は旧日本測地系に基づく平面直角座標系第VII系を用いた。これら現地調査にあたっての基準点等については、後述する浜経田遺跡、仏田遺跡、江口遺跡とも同様である。

(2) 埋蔵文化財調査の結果

平伝寺東遺跡における試掘調査の結果、調査対象地内において遺物は出土するものの、発掘調査等の保護措置が必要となる遺構や遺物包含層は確認できなかった。

(3) 基本層序

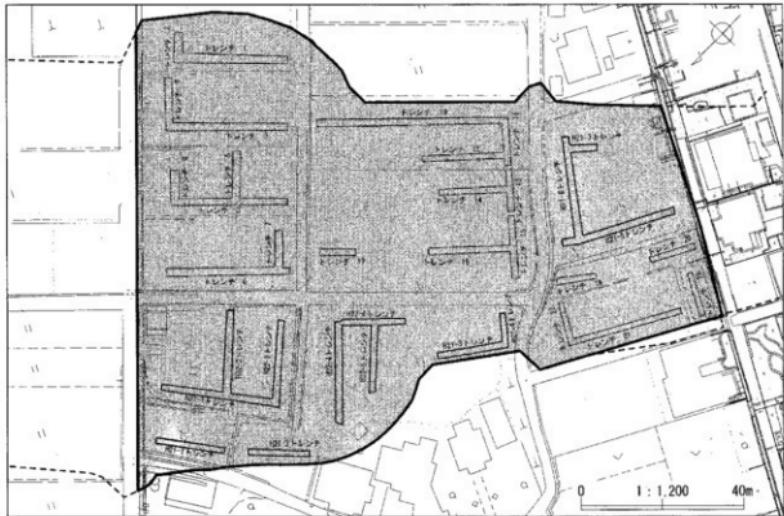
基本層序はⅠ層(耕作土)・Ⅱ層(盛土)・Ⅲ層(砂礫層)・Ⅳ層(黒色土層)・Ⅴ層(シルト層)・Ⅵ層(地山)に大別できる。黒色土とシルト層の間(層界)より遺物が出土していることから、これらより上位の層は砂礫層として地山の砂礫層と区別した。以下、調査結果について述べる。

(4) 埋蔵文化財調査の詳細

発掘調査は平成20～22年度の3ヶ年にわたって行った。複数年度の発掘調査のため、平成21年度以降の発掘調査については、トレンチ番号の前に平成21年度は「H21」、平成22年度は「H22」と年度を付することで、区別することとした。トレンチ番号については、各年度とも掘削順に番号を付した。

調査区中央付近の10～16トレンチにおいて確認された砂礫層下にある黒色土層直下(シルト層上面)から遺物の出土が確認された。このシルト層の遺存範囲は狭く、遺構は確認されなかった。耕作土・盛土の下位は地山の砂礫層が基本であった。この砂礫層上に旧河道の痕跡がいくつか確認され、これらの埋土としてシルトや黒色土の土層が堆積したと思われる。調査区内において遺物が出土していることから、周辺に遺跡が存在する可能性や過去の圃場整備の結果、既に遺跡が削平された可能性等が想定される。

今回の発掘調査では、遺物は確認されたが保護措置が必要となる遺構や遺物包含層等は確認されなかった。調査対象範囲周辺は圃場整備等により地形が大きく改変されていると考えられる。



第2図 平伝寺東遺跡の調査範囲(縮尺1:1,200)

(5) 遺 物

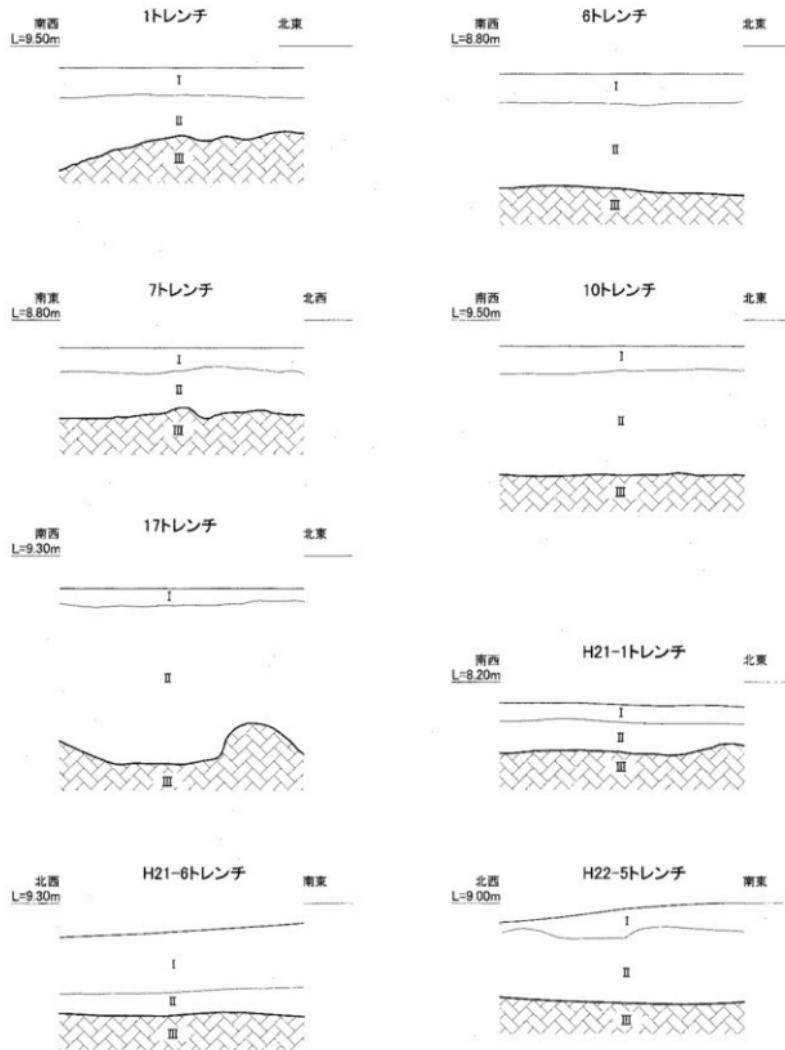
遺物は耕作土・盛土中から出土するものが多く、古代・中近世の遺物が出土するなど帰属時期も様々である。そのため、遺物は原位置を留めておらず、耕作土・盛土と共に近隣から移動してきたものと考えられる。

1は土師器甕の体部である。体部内面はナデが施され、外面には横位のカキメが施されている。2は須恵器杯の口縁部である。口縁部は直線的に開いて立ち上がり、口縁端部は先細りする。3は珠洲焼壺の底部である。体部は開いて立ち上がり、底部は平底を呈する。4は越中瀬戸焼天目碗の底部である。体部には黒色の釉が施され、底部外面は露胎である。底部は削り込み高台である。

その他にも細片であるため図示できないが、土師器杯、須恵器杯などが出土した。

第3図 平伝寺東遺跡トレンチ配置図 (縮尺 1 : 800)

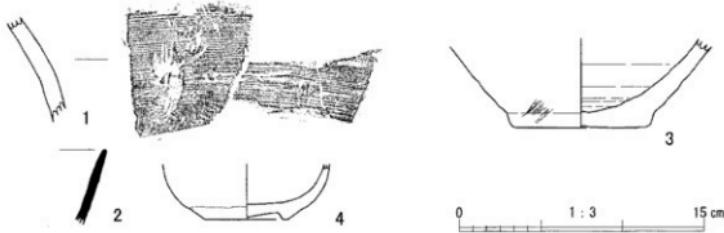




I	(耕作土)	10YR7/6 明黄褐色シルト	φ1~3cm大の礫を少量含む。粘性やや強い。
II	(盛土)	2.5Y5/3 黄褐色砂質土	φ2~5cm大の礫を含む。しまり弱い。
III	(地山)	2.5Y5/6 黄褐色砂礫土	φ1~15cm大の礫を多く含む。しまり弱い。

0 1 : 40 2m

第4図 平伝寺東遺跡土層断面図（縮尺1:40）



第5図 平伝寺東遺跡出土遺物実測図(縮尺1:3)

第2節 浜経田遺跡

(1) 現地調査の方法と発掘面積

現地調査は0.25m²のバックホウ(標準バケット)による機械掘削及び人力掘削により、トレンチ内を耕作土ないし盛土から地山と考えられる黄橙色系の砂礫層まで掘り下げ、遺構・遺物の遺存状況を確認した。トレンチは現在の水田区割りに沿って設定し、「L」、「T」、「E」字状となるように設定した。ただし、H21-12・13トレンチについては、調査区内にバックホウが進入できなかつたため、2m×2mのトレンチを設定して人力により掘削した。

浜経田遺跡は平成20～22年度に現地調査を実施し、3ヶ年の調査対象面積は合計21,850m²(平成20年度15,252m²、平成21年度3,963m²、平成22年度2,635m²)、総調査面積1,268m²(平成20年度791m²、平成21年度309m²、平成22年度168m²)、合計トレンチ本数は65本(平成20年度44本、平成21年度13本、平成22年度8本)である。調査面積は調査対象面積の約5.8%にある。

(2) 埋蔵文化財調査の結果

浜経田遺跡における試掘調査の結果、調査対象地内において遺物は出土するものの、発掘調査等の保護措置が必要となる遺構や遺物包含層は確認できなかつた。

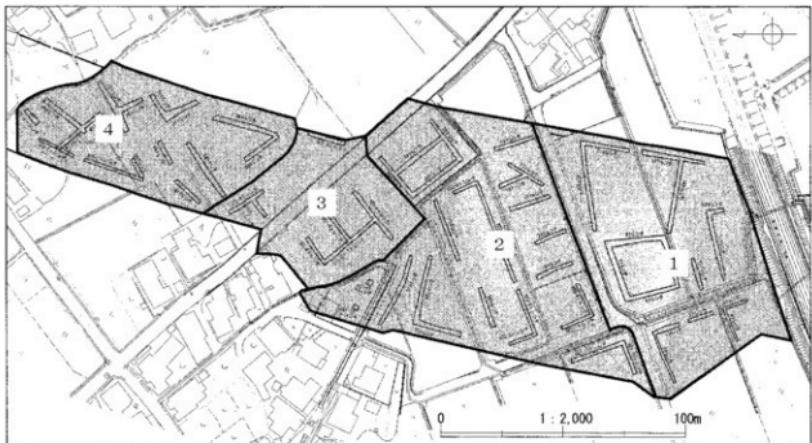
(3) 基本層序

基本層序はⅠ層(耕作土)・Ⅱ層(盛土)・Ⅲ層(盛土・砂層・砂礫層)・Ⅳ層(地山)に大別できる。耕作土の下層は主に褐色を呈する盛土であり、地山は黄橙色ないし灰白色を呈するシルト層・砂層・砂礫層である。以下、調査結果について述べる。

(4) 埋蔵文化財調査の詳細

発掘調査は平成20～22年度の3ヶ年にわたって行った。複数年度の発掘調査のため、平成21年度以降の発掘調査については、トレンチ番号の前に平成21年度は「H21」、平成22年度は「H22」と年度を付することで、区別することとした。トレンチ番号については、各年度とも掘削順に番号を付した。また、発掘調査の詳細を説明するにあたり、調査結果を総合的に説明するため、調査範囲を4分割し、1単位を「調査区」と任意で設定し、各トレンチから得られた結果を調査区ごとに総合して説明する(第6図)。

今回の調査対象地内では、発掘調査等の保護措置が必要となる遺構や遺物包含層は確認されなかつた。調査対象範囲は圃場整備等により地形が大きく改変されていると考えられる。調査区3では、宅



第6図 浜経田遺跡の調査範囲と調査区名の設定(縮尺1:2,000)

地の造成土下には明黄褐色ないし淡黄色シルト層が厚く堆積していた。このシルト層からは古代の須恵器や土師器等が出土した。なお、地山も類似するシルト層であった。地山面で遺構の検出を試みたが、明確な遺構を確認するには至らなかった。この調査区3と比較すると、調査区1・2・4では、調査区3で確認されたシルト層は確認されず、耕作土及び圃場整備の盛土より下は砂礫層の地山であり、遺物も希薄であった。過去の圃場整備によって、調査対象地の全てとは言えないが、ある程度の範囲で地山のシルト層が削平されたものと考えられる。

(5) 遺 物

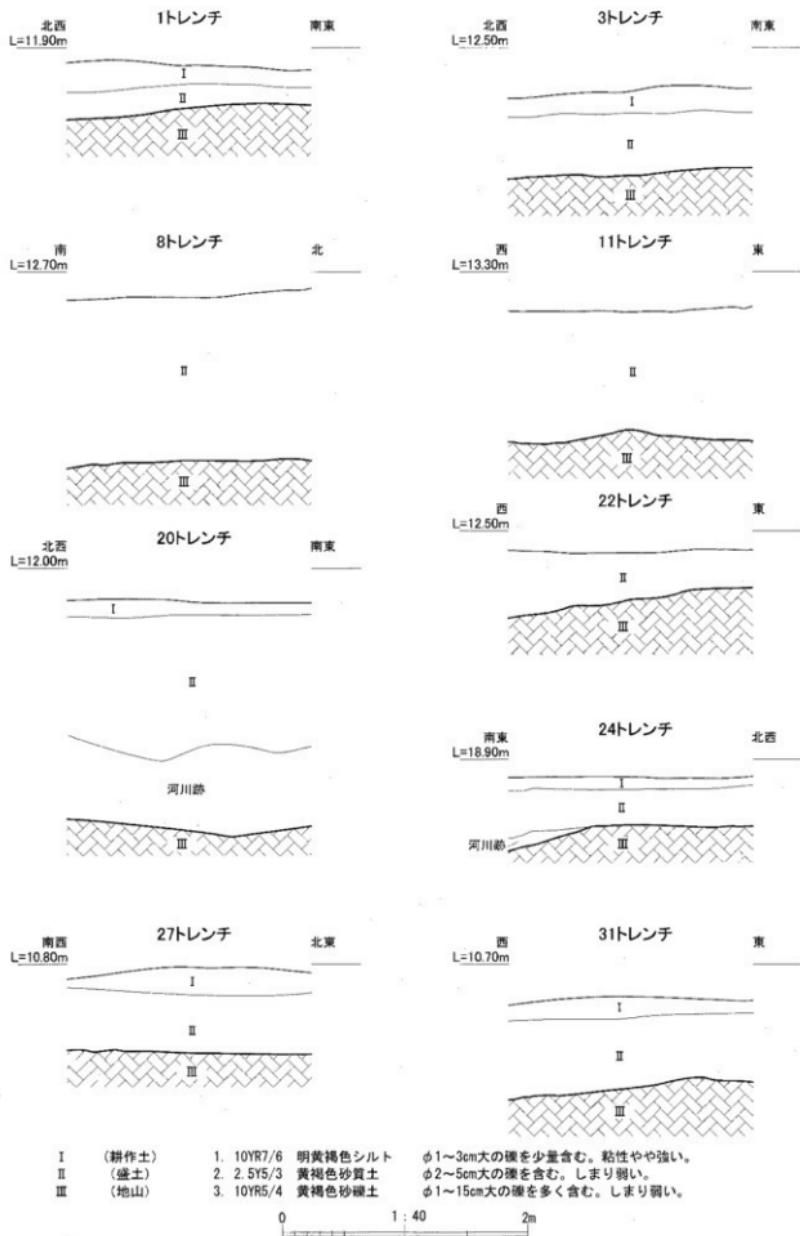
遺物は耕作土・盛土中から出土するものが多く、縄文土器や古代・中近世の遺物が出土するなど縄属時期も様々である。出土した遺物は原位置を留めておらず、耕作土・盛土と共に近隣から移動してきたものと考えられる。

1は須恵器蓋である。体部は直線的にハの字に開き、端部は小さく下方につまみ出され三角形を呈する。天井部は若干丸みを帯び、ヘラケズリのちナデが施される。盛土中からの出土である。2は珠洲焼擂鉢の口縁部である。口縁部は直線的に延び、口縁端部は面をもち三角形を呈す。内面には単位不明の彫り目が施されている。盛土中からの出土である。3は越中瀬戸焼皿である。口縁部は内湾しながら立ち上がり、口縁端部は先細りする。口縁部には灰白色の釉が施され、底部内外面は露胎である。内面見込みには釉止めの段を有し、菊花文が押捺されている。盛土下の砂礫層からの出土である。4は縄文土器深鉢の体部である。地文に縄文を施す無文深鉢である。円筒形に近い器形を呈し、縄文はLRを用いる。盛土中からの出土である。5は木製品である。上部は幅が広く三角状を呈し、下部に向かって先細りする。用途は不明である。耕作土中からの出土である。

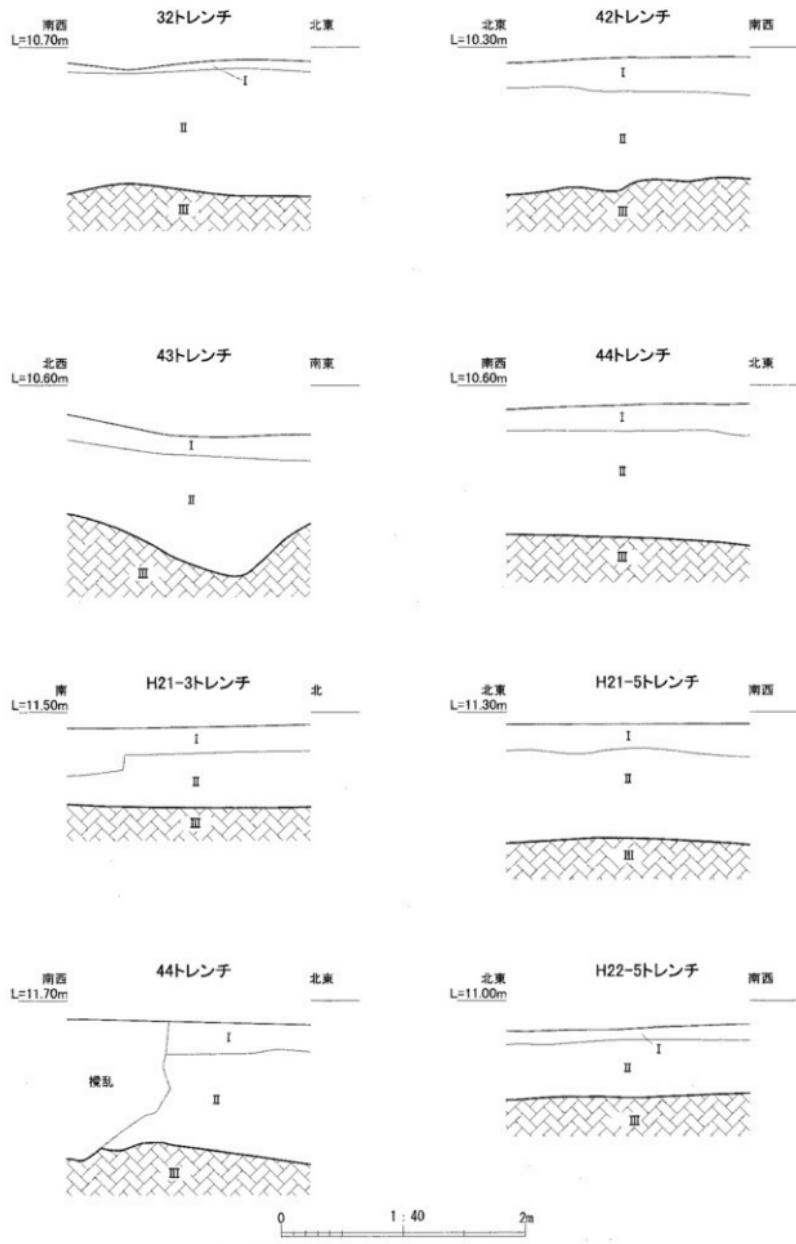
その他にも細片であるため図示できないが、須恵器や土師器、磁器などが出土した。



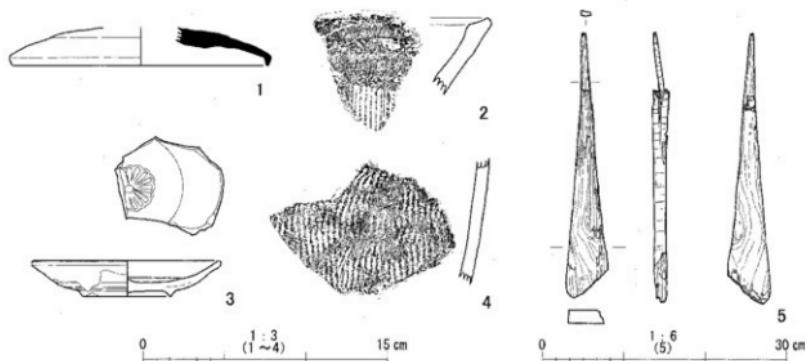
第7図 浜田町遺跡レンチ配置図（縮尺1：1,200）



第8図 浜経田遺跡土層断面図1 (縮尺1:40)



第9図 浜経田遺跡土層断面図2 (縮尺1:40)



第10図 浜経田遺跡出土遺物実測図(縮尺1:3、1:6)

第3節 仏田遺跡

(1) 現地調査の方法と発掘面積

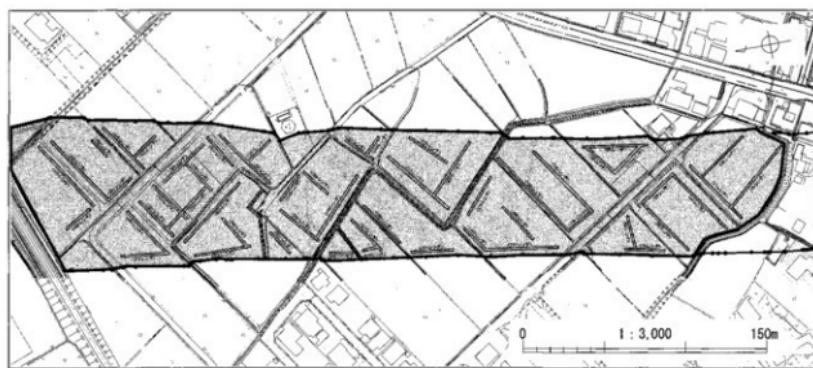
現地調査は0.25m²のパックホウ(標準パケット)及び人力で耕作土から地山と考えられる黄色系のシルト層、又は灰白色の砂礫層まで掘り下げ、遺構・遺物の遺存状況を確認した。トレントは現在の水田区割りに沿って設定し、最終的には「L」、「T」字状あるいはその組み合わせとなるように掘削した。調査は、国道8号バイパスの路線範囲内で、かつ仏田遺跡に指定されている範囲を南から北に向かって行った。調査対象面積は35,213m²である。トレント名は掘削順に付し、1～53トレントまで設定した。なお、49～53トレントは仏田遺跡の北端まで調査を終えた後に追加で設定したトレントのため、位置はやや不規則である。試掘トレントの合計本数は53本であり、総面積は2,247m²である。これは調査対象面積の約6.4%にあたる。

(2) 埋蔵文化財調査の結果

仏田遺跡の調査対象地内において遺構・遺物を確認した。遺構の広がりが確認されたのは、調査対象範囲の中央部からである(第13図)。その範囲面積は約16,500m²であり、帰属時期は、出土遺物からおおむね古代と推定できる。また、部分的に古代の遺物包含層を確認した(15・22・23トレント)。圃場整備等の削平の影響と考えられるが、遺物包含層は遺跡の限られた範囲に散在して広がっている。

さらに、古代の遺構検出面から約0.8m下において縄文時代の遺物包含層を確認した(26・27・50～53トレント)。この遺物包含層に対応する土層は広範囲にわたるが、遺物を包含する範囲は限られており、約2,000m²となる。よって、記録保存等の保護措置が必要な範囲は、上面約16,500m²、下面約2,000m²、合わせて約18,500m²である(第14図)。

なお、出土した遺物は、縄文時代遺物包含層からは縄文土器の深鉢等が、古代の包含層・遺構からは須恵器・土師器・灰釉陶器・鉄器等が、耕作土・盛土中からは伊万里焼、唐津焼、越中瀬戸焼等が出土した。出土した遺物はコンテナ数にして約20箱である。



第11図 仏田遺跡の調査範囲(縮尺1:3,000)

(3) 基本層序

土層はI層(耕作土)・II層(盛土)・III層(古代遺物包含層)・IV層(古代の遺構が掘り込まれる土層)、V層(縄文遺物包含層)・VI層(地山)に大別する事ができる。以下層序ごとに詳細を述べる。

I層は水田耕作土である。試掘調査開始前に行った分布調査では、耕作土中から古墳・古代・中近世の遺物が採集されている。耕作土中に遺物が出土したのは、圃場整備時の土地改変の結果、古代の遺物包含層や遺構等が削平され、遺物が混入したと考えられる。II層の大半は圃場整備時の盛土と推定される。層界は平坦面であり、圃場整備時に運び込まれた土や移動された土であると考えられる。III層は調査対象地のごく一部(15・22・23トレンチ)で確認された古代の遺物包含層である。包含層は黒色～黒褐色シルトを呈する。IV層は、古代の遺構が掘り込まれる土層とした。色調は黄色系シルトを呈する。V層は縄文時代の遺物包含層であり、51トレンチで遺物が確認された。周辺のトレンチでは遺物は出土していないが、V層に相当する土層は確認された。VI層は地山である。これ以上掘削しても遺構は存在しないと判断し、掘削を止めた土層であり、おおむね砂礫層にて掘削を止めている。

(4) 埋蔵文化財調査の詳細

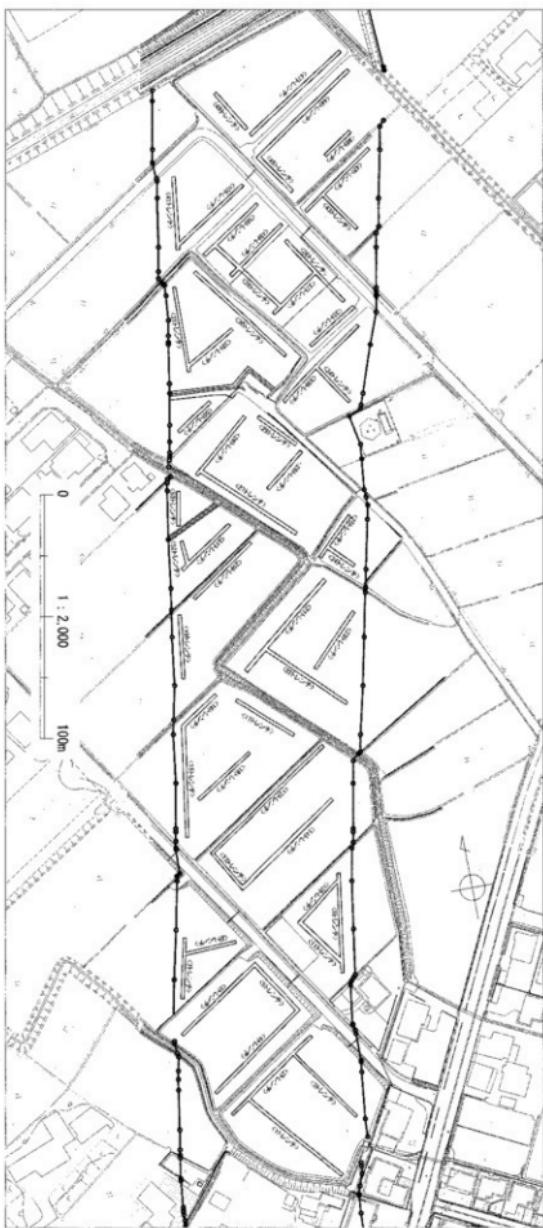
現地調査の結果、調査範囲の中央より古代の遺構・遺物包含層および縄文時代の遺物包含層が確認された(第14図)。調査範囲南側(1~8トレンチ)及び北側(30~32・35~48トレンチ)からは遺構は確認されず、遺物の出土も希薄であった。

確認された古代の遺構は調査対象範囲の中央付近に密集しており、遺構の掘り込まれる土層はIV層のシルト層で、砂質土層や砂礫層では遺構は確認されなかった。

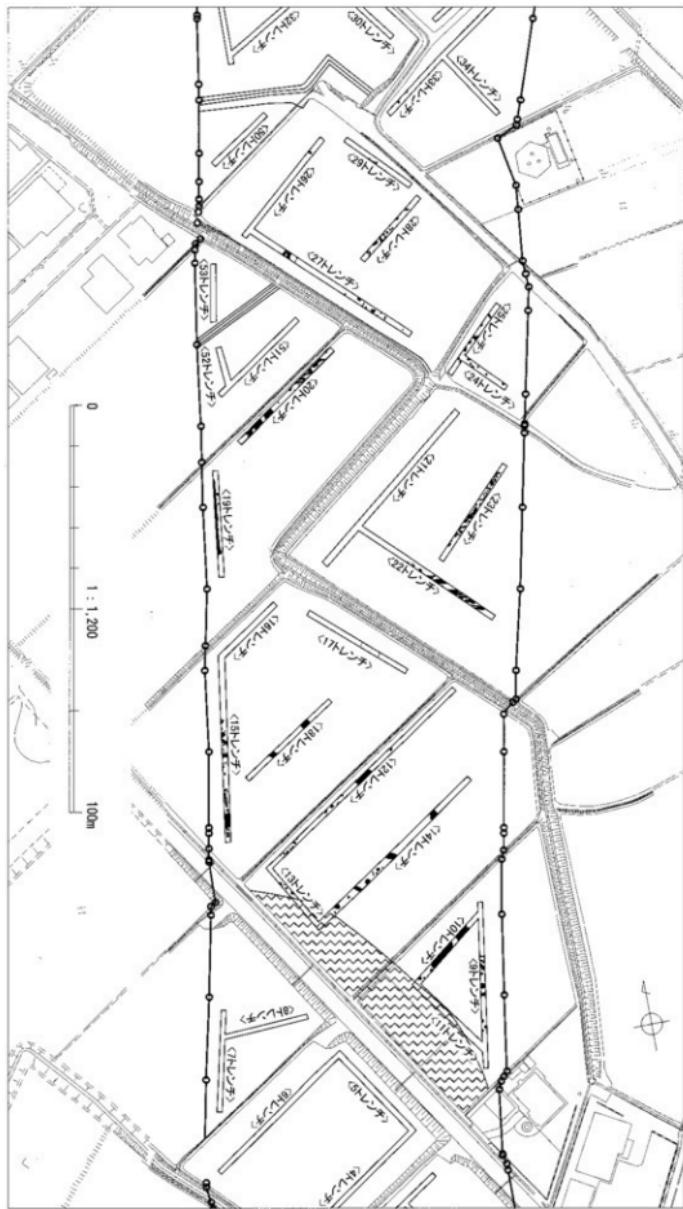
調査の結果、15・22・23トレンチから古代の遺物包含層が確認された。15トレンチではトレンチ南端から36m地点まで確認されている。ただし連続する16トレンチ、隣接する18トレンチにおいては確認できなかつたことから、遺物包含層は限られた範囲にしか存在しないと考えられ、周辺のトレンチでも遺物包含層は確認されなかつた。

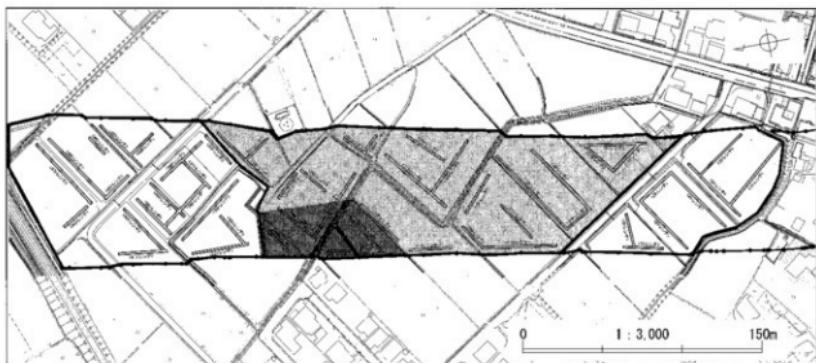
また、15トレンチから少し離れた北東に位置する22・23トレンチから古代の遺物包含層が確認された。北東から南西にかけて黒色シルトが堆積しており、23トレンチにおける黒色シルトから遺物が多数出土するが、22トレンチでは黒色を呈する遺物包含層は確認されるも遺物は出土しなかつた。さらに26・27・50~53トレンチからは縄文時代の遺物包含層も確認された。近接する26トレンチを再掘削した結果、50~53トレンチで確認された黒色を呈する土層が確認された。この土

第12図 仏田遺跡トレーンチ配置図（縮尺1：2,000）



第13図 伊田遺跡構査図（縮尺1:1,200）





第14図 伊田遺跡本发掘調査対象範囲(縮尺1:3,000)
(濃い網掛け部分は縄文時代の遺物包含層も確認された範囲)

層からは遺物は出土しなかったものの、隣接する50～53トレンチでみられる縄文時代の遺物包含層と近似していることから、26・27トレンチで確認された黒色を呈する土層も縄文時代遺物包含層とした。

(5) 遺 物

遺物は古代に帰属するものが大多数を占める。古代の遺物は包含層内・遺構内・遺構検出時に出土した。中近世の遺物はわずかで、全て耕作土や盛土からの出土であった。

縄文時代の遺物包含層からは縄文土器深鉢が数点出土した。遺物の出土は50・51・52トレンチにおいて確認された。帰属時期はおおむね縄文時代晚期初頭(御経塚式)に位置付けられるものと思われる。

古代の遺物は須恵器・土師器等が出土し、特異な遺物として鉄滓が挙げられる。魚津市における鉄滓の出土例としてはこれまでに早月上野遺跡・吉野遺跡での出土が挙げられ、伊田遺跡で3遺跡目となる。古代の遺物の帰属時期は9世紀に位置付けられる。

以下、トレンチごとに主な遺物について記す。

9トレンチ

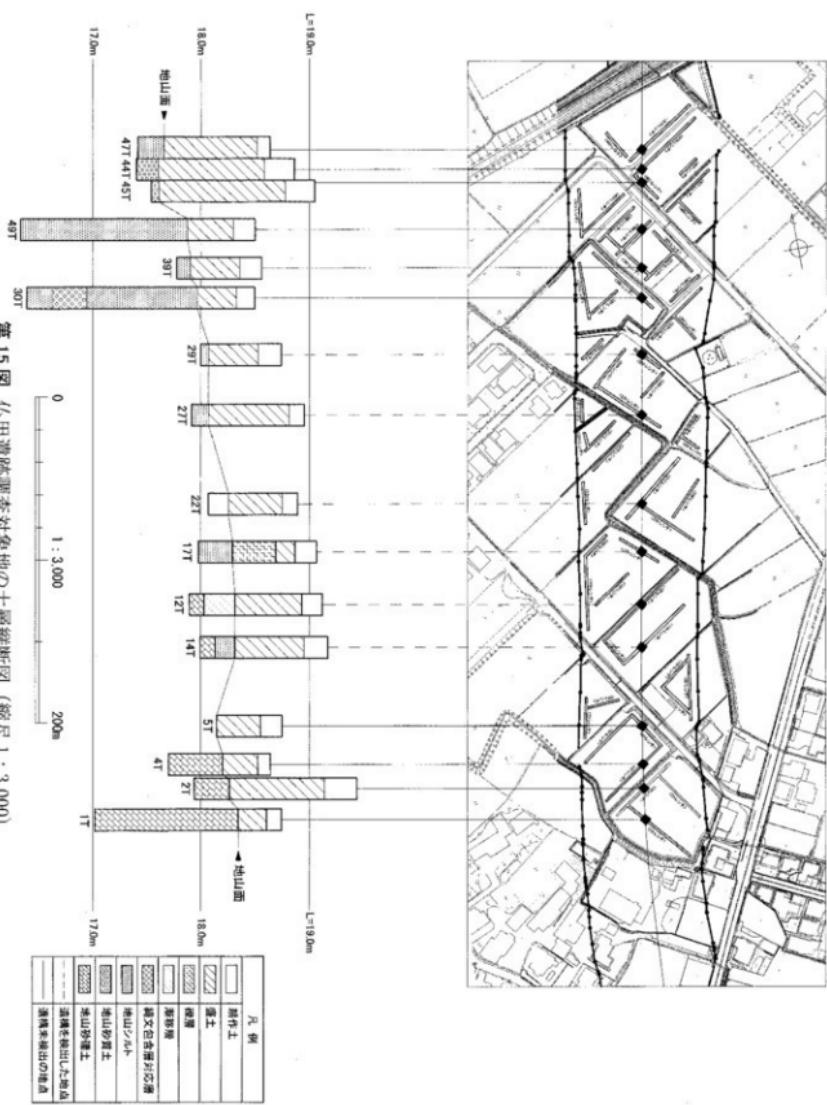
1は土師器杯の底部である。体部は開いて立ち上がり、内面にはミガキ調整、底部には糸切り痕が認められる。2は須恵器有台杯である。体部は直立気味に立ち上がる。高台は若干厚いが短く小さい。3は須恵器蓋である。体部は直線的にハの字に開き、口縁端部で若干反り上がる。端部は小さくつまみ出され、断面四角形を呈する。天井部には宝珠のつまみがつく。

10トレンチ

4・5は須恵器蓋である。4の体部は直線的にハの字に開き、端部は小さくつまみ出され三角形を呈する。天井部は平らであり、ヘラケズリのちナデが施される。5の体部は直線的にハの字に開き、横方向に反る。端部は小さくつまみ出され丸く収まる。天井部は平らであり、ヘラケズリ痕が認められる。また、欠損しているが宝珠の一部が認められる。

12トレンチ

6～9は須恵器蓋である。6の体部は内湾しながら開き、端部は小さくつまみ出され丸く収まる。天井部は丸みを帯び、宝珠がつく。7の体部は直線的にハの字に開き、口縁部は上方に反りあがる。端部は丸く収まる。天井部はヘラケズリのちナデが施されている。8の体部は内湾しながら開き、口



第15図 伊丹遺跡調査対象地の土層断面図（縮尺1：3,000）

縁部は若干横方向に屈曲する。端部は小さくつまみ出され丸く収まる。天井部は丸みを帯び、ヘラケズリのちナデが施されている。9は体部がやや内湾しながら開く。天井部はヘラケズリのちナデが施され、宝珠のつまみがつく。

13トレンチ

10は鉄滓である。その他にも細片であるため図示できないが、須恵器蓋・杯、土師器甕などが出土した。

14トレンチ

11・12はフイゴの羽口である。11は復元径8.5cm、復元孔径2.8cmを測る。外面には鉄滓が付着している。12は復元径7.2cm、孔径3.0cmを測る。端部は面をもつ。

15トレンチ

13は須恵器壺の胴部である。胸部は丸く、肩部に自然難がかかる。14は土師器杯である。体部は内湾しながら立ち上がり、口縁端部は若干先細りする。内面上半にはヨコナデが、下半から底面にかけてはミガキが施されている。底部には糸切り痕が認められる。

19トレンチ

15は須恵器蓋である。体部は直線的にハの字に開き、口縁部は若干上方に反りあがる。端部は小さくつまみ出され、丸く収まる。天井部はヘラケズリ痕が認められる。16は唐津焼縁釉皿の底部である。体部は内湾しながら立ち上がる。底部は削り出し高台である。内面には銅緑釉が施され、内面見込み部分は蛇の目釉剥ぎを施す。

20トレンチ

17・18は須恵器無台杯である。17の口縁部は若干内湾しながら立ち上がり、口縁端部は先細りする。底部は回転ヘラ切りのちナデが施され、底面は平底を呈す。18の口縁部は直立気味に立ち上がり、口縁端部は先細りする。器壁はやや厚く、浅身である。底部は回転ヘラ切りのちナデが施され、底面は若干丸みを帯びる。19は土師器杯の底部である。体部は開いて立ち上がり、内面にはミガキが施されている。底部には糸切り痕が認められる。20は須恵器有台杯である。体部は直立気味にやや短く立ち上がり、口縁端部は先細りする。

21トレンチ

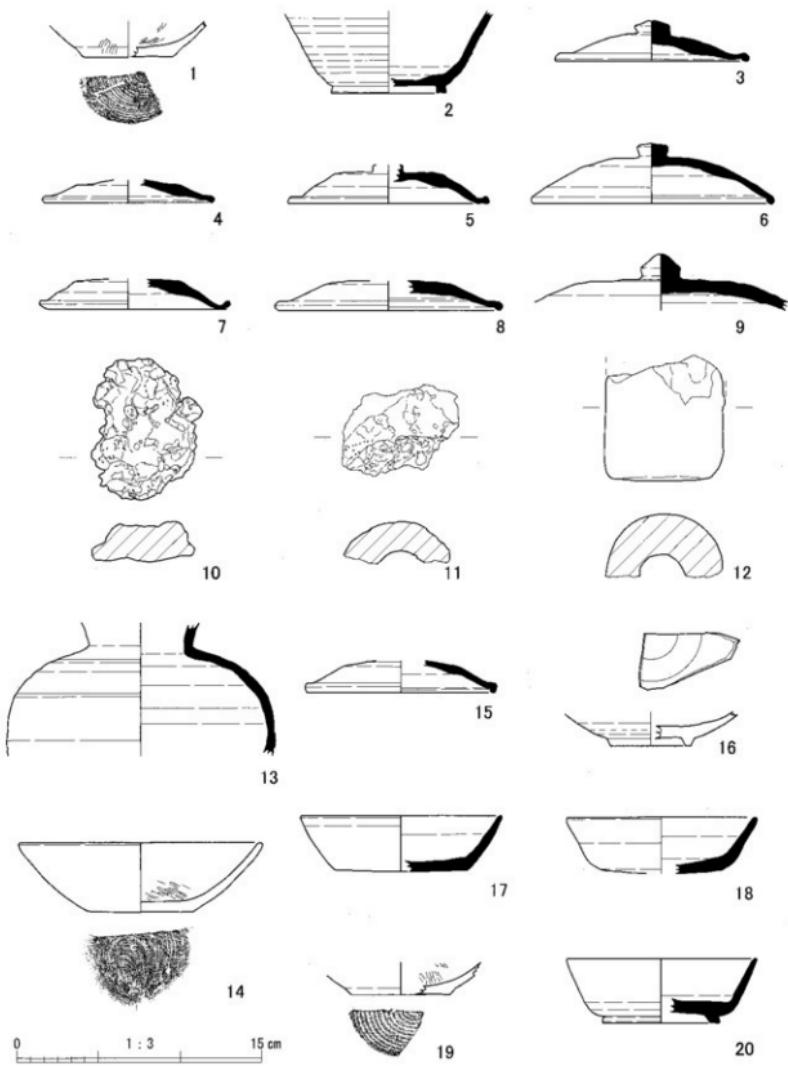
21は須恵器無台杯である。口縁部は若干内湾しながら立ち上がり、口縁端部は先細りする。器壁はやや薄く、若干浅身である。底部は回転ヘラ切り痕が認められる。22・23は須恵器甕の口縁部である。口縁部は外反し、口縁端部は面をもつ。口縁部外面直下をつまみ出し、突帶をつくる。突帶下には2条一単位の波状文を配す。

22トレンチ

24は土師器小甕である。口縁部は外傾し口縁端部はやや丸みを帯びる。体部上半はヨコナデが、体部下半は下から上方向のケズリが施されている。

23トレンチ

25・26は土師器杯である。25は体部外面にミガキが施されている。底部は回転ヘラ切り痕が認められる。26は体部が内湾しながら立ち上がり、口縁端部は先細りする。内外面上半にはヨコナデが、下半から底部にはミガキが施されている。底部には糸切り痕が認められる。外面および内面口縁部にはススが付着している。27は土師器小甕である。体部は丸みをおびて立ち上がる。内外面ともナデが施され、底部は平底を呈する。28～30は須恵器有台杯である。29・30の体部は直立気味に立ち上がり、口縁端部は先細りする。28～30の高台は若干厚いが短く小ぶりである。体部の立ち上がり箇所よりも若干内側に貼付される。31は須恵器有台杯である。体部は直立気味に立ち上がり、口縁端部は先細りする。32は須恵器甕の頸部である。頸部は「く」の字に屈曲し、口縁部は外反しながら立ち上がる。頸部には2条一単位の波状文を配す。体部外面には叩き目が、内面には同心円の叩き目が施されている。



第16図 仏田遺跡出土遺物実測図1 (縮尺1:3)

24トレント

33は須恵器蓋である。体部は直線的にハの字に開き、端部は小さくつまみ出され、丸く收まる。器壁は厚く、天井部はヘラケズリ痕が認められる。

25トレント

34は須恵器蓋である。体部は直線的にハの字に開き、口縁部は若干上方に反りあがる。端部は小さくつまみ出され、丸く收まる。天井部はヘラケズリ痕が認められる。

27トレント

35は須恵器無台杯の底部である。器壁はやや薄く、底部は回転ヘラ切りのちナデが施され、底面はやや丸味を帯びる。

30トレント

36は須恵器甕の口縁部である。口縁部は外反し、口縁端部は面をもつ。

35トレント

37は伊万里焼碗の口縁部である。体部は外反しながら立ち上がる。体部外面には草花文が描かれている。体部は白色の釉が施され、貫入が顯著である。

36トレント

38は越中瀬戸焼鉢鉢の底部である。体部内面には13本1単位の掘り目が若干の間隔を持って施されている。底部には糸切り痕が認められる。内外面には鉄釉が施されている。

38トレント

39は肥前系陶磁器の白磁皿である。菊花型押して、全体に乳白色の釉を施し底部は蛇の目凹形高台である。

39トレント

40は須恵器無台杯である。口縁部は若干内湾しながら立ち上がり、口縁端部は先細りする。器壁はやや厚く、浅身である。底部は回転ヘラ切りのちナデが施され、底面はやや丸味を帯びる。41は伊万里焼もしくは瀬戸美濃焼の碗である。体部は内湾しながら立ち上がり、口縁部で若干外反する。全体に透明釉が施され、疊付は露胎である。口縁部内面には濃線を引き、体部外面には波文を描き、内面見込み部分には岩に碎ける波涛文が描かれる。

42トレント

42は繩文土器深鉢底部である。外面および底面の調整はナデである。

44トレント

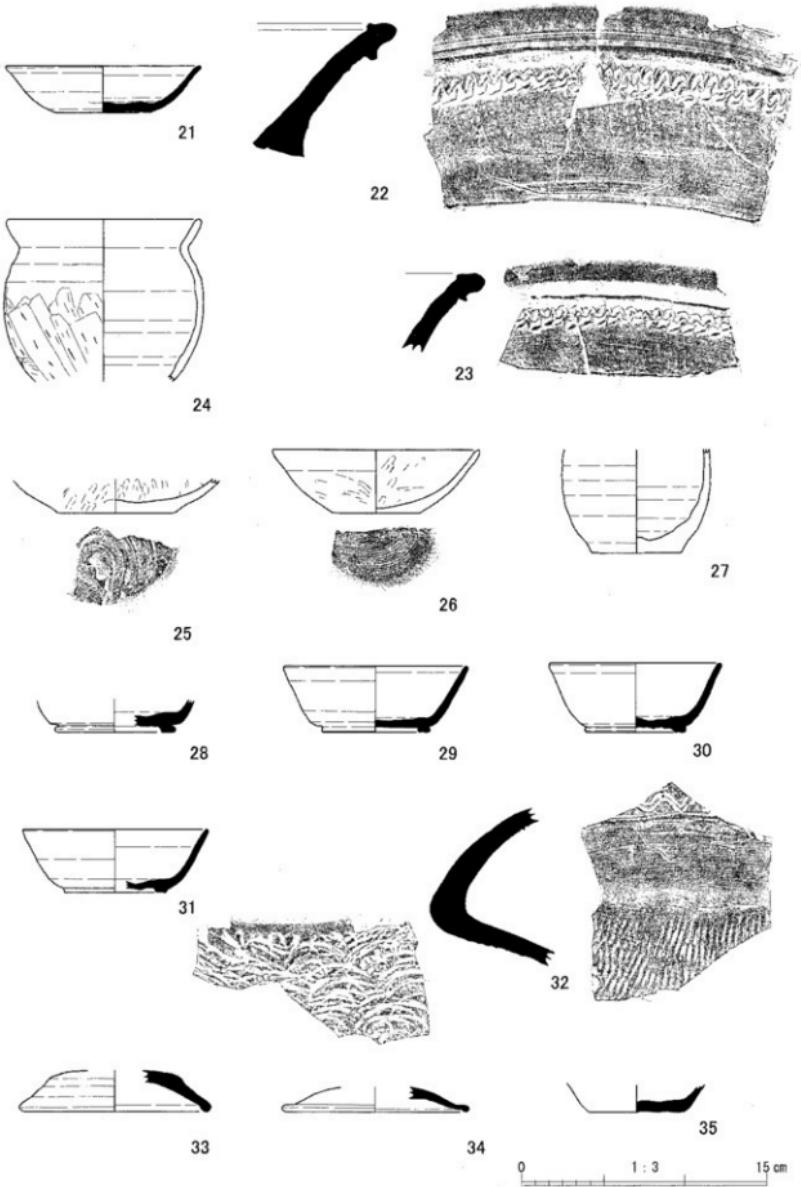
43は須恵器蓋である。体部は直線的にハの字に開き、端部は小さくつまみ出され三角形を呈する。天井部は平らであり、ヘラケズリのちナデが施される。

50トレント

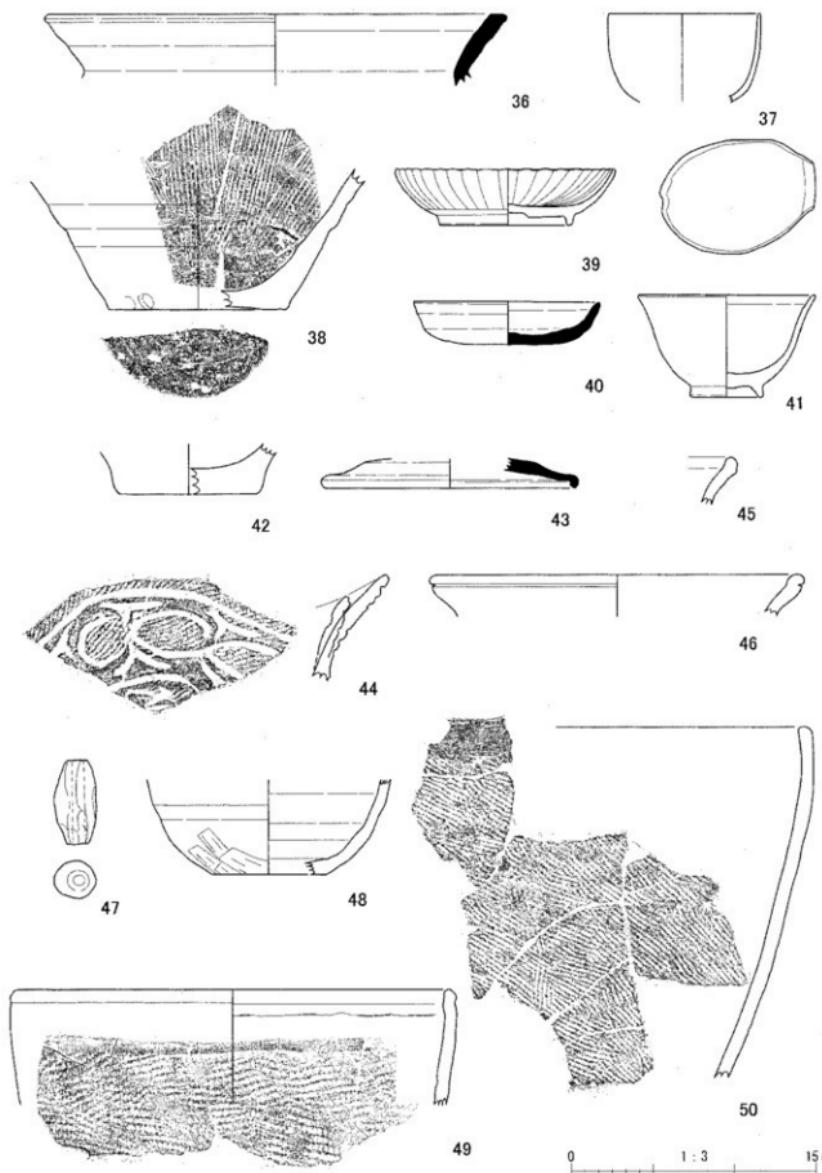
44は繩文土器深鉢の口縁部である。口縁端部はやや幅が広い台形状の波頂部をもつ。口唇部には1条の沈線を口縁形に沿って配し、上方を幅の狭い繩文帯とする。口縁部には口縁形に沿って横位に連結構円状文を配し、連結部に三叉文を上下に施す。内部には繩文を充填する。頭部にも同様な曲線状の文様を配す。口縁内面には波頂部で途切れる凹線を配したあと、全面を研磨する。繩文は筋の細かいL Rを用いる。45は土師器甕の口縁部である。口縁部は外傾し、口縁端部を上方に引き出す。口縁端部はやや丸い。46は土師器甕の口縁部である。口縁部は若干屈曲しながら立ち上がり、口縁端部は丸く收まる。口縁部外面には1条の沈線を施す。47は土錐である。長さ5.3cm、幅2.6cm、孔径0.8cmを測る。中央が若干ふくらむ棒状を呈する。

51トレント

48は土師器甕の体部である。体部は内湾しながら立ち上がる。体部外面下半は斜め下から斜め上方向にケズリが、体部上半はヨコナデが施されている。体部内外面にはススが付着している。49・50は繩文土器深鉢の口縁部である。地文に繩文を施す無文深鉢である。円筒形に近い器形を呈し、



第 17 図 仏田遺跡出土遺物実測図 2 (縮尺 1 : 3)



第18図 仏田遺跡出土遺物実測図3(縮尺1:3)

口縁部がわずかに内湾する。口唇部にナデを施し、地文の磨消しにより無文部を作出する。縄文はLRを用いる。49は口縁内面に接合痕を残す。50は無文部の幅が比較的長い。

第4節 江口遺跡

(1) 現地調査の方法と発掘面積

現地調査は、 0.25m^2 (標準バケット)による機械掘削及び人力掘削により、トレント内を耕作土ないし盛土から地山と考えられる黄色系シルト層、又は灰色系の砂礫層まで掘り下げ、遺構・遺物の遺存状況を確認した。トレントは現在の水田区割りに沿って設定し、最終的には「L」、「T」字状あるいはその組み合わせとなるよう掘削した。また、掘削状況によって方形を基調として掘削した箇所もある。江口遺跡は平成21～23年度に現地調査が行われ、3ヶ年の調査対象面積は合計 $7,177\text{m}^2$ (平成21年度 $1,008\text{m}^2$ 、平成22年度 420m^2 、平成23年度 $5,749\text{m}^2$)、合計トレント本数37本(平成21年度6本、平成22年度3本、平成23年度28本)である。調査面積は 733m^2 で、調査対象面積の約10.2%にあたる。



第19図 江口遺跡の調査範囲(縮尺 1 : 2,000)

(2) 埋蔵文化財調査の結果

江口遺跡の調査対象地内において遺構・遺物を確認した。遺構の広がりは調査対象範囲内の北側半部分を中心に確認された(第19図)。記録保存等の保護措置が必要な範囲は、約 $3,890\text{m}^2$ である(第20図)。出土した遺物は、古代の須恵器や土師器等で、おおむね古代と推定できる。出土した遺物はコンテナ数にして約5箱である。

(3) 基本層序

土層はI層(耕作土)・II層(盛土)・III層(古代の遺物包含層)・IV層(地山)に大別することができる。以下、層序ごとに詳細を述べる。

I層は水田耕作土である。調査対象地の北側については、調査前には畠や建物、作業場等として利用され、調査対象地の南側は水田であった。遺物等の出土は確認されなかった。II層は盛土である。南側については礫層、北側は明黄灰シルトや暗灰黄色土であったが、いずれも客土であり、盛土として一括した。III層は北側の大部分の範囲(4～21トレント)で確認された。古代の遺物包含層は、黒

褐色を呈するシルト層である。地山は北西方向へ傾斜しているものの、遺物包含層は、水平な堆積状況を呈している。造成時等に、遺物包含層の上部が削平された可能性が考えられる。IV層は地山の褐色シルト層である。なお、褐色シルト層をさらに掘り進めると、砂礫層に達する。遺物包含層が確認できない部分では、褐色シルト層の地山はみられず、盛土直下が砂礫層になっており、地山まで削平されていた。

(4) 埋蔵文化財調査の詳細

発掘調査は平成21～23年度の3カ年にわたり実施した。トレント番号については、調査ごとに掘削順で「1トレント」、「2トレント」と名前を付け、さらに各年度での確認調査については、トレント番号の前に平成21年度であれば「H21」と年度を付けて区分することを基本とした。但し、平成23年度の確認調査については、同一年度で3回の確認調査が実施されたため、最終的に平成23年度調査として新たに通し番号でトレント番号を付けた。

調査の結果、調査対象地の南側については、発掘調査等の保護措置が必要となる遺構や遺物包含層は確認されなかった。調査対象地の北側については大部分の範囲で、古代の遺構・包含層が確認された。包含層は、一部削平により地山の礫層が確認された地点を除いて、広範囲に確認された。

確認された古代の遺構は、土坑・溝・ピット等がある。遺構の掘り込まれる土層は、地山の褐色シルト層であった。



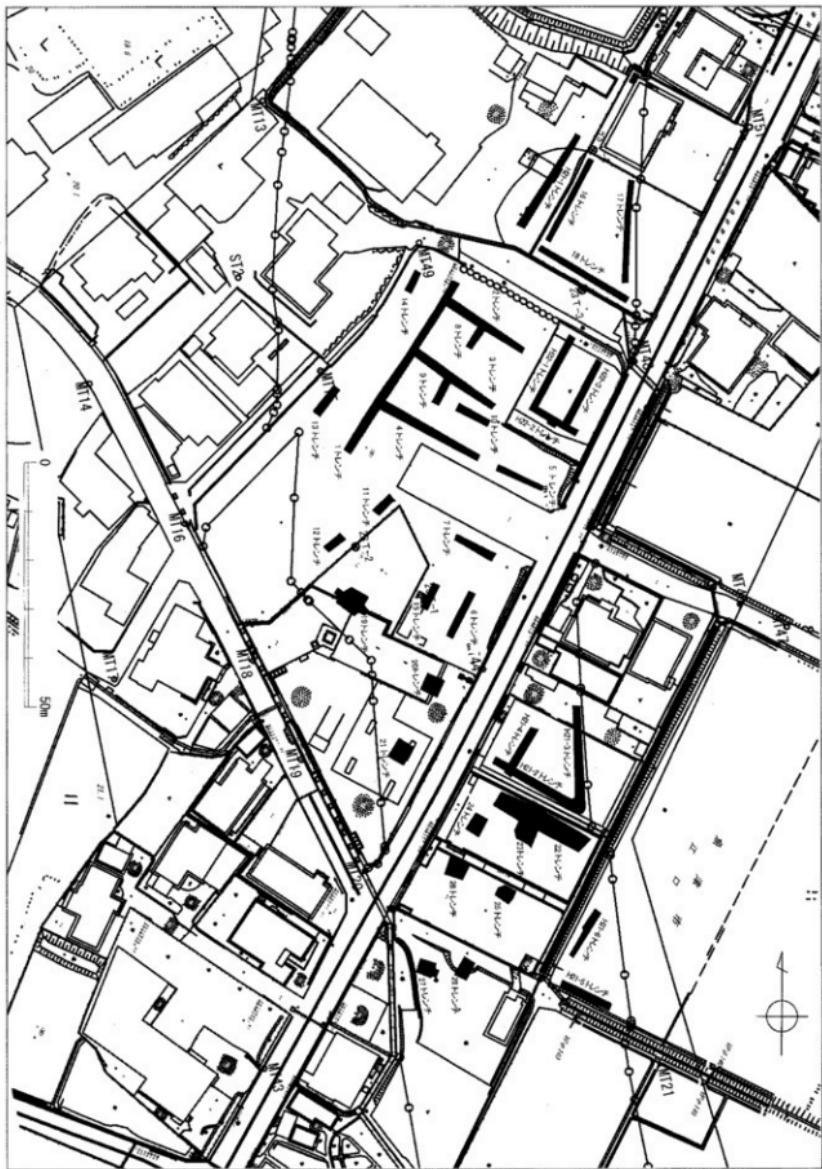
第20図 江口遺跡本発掘調査対象範囲(網掛け部分)(縮尺1:2,000)

(5) 遺 物

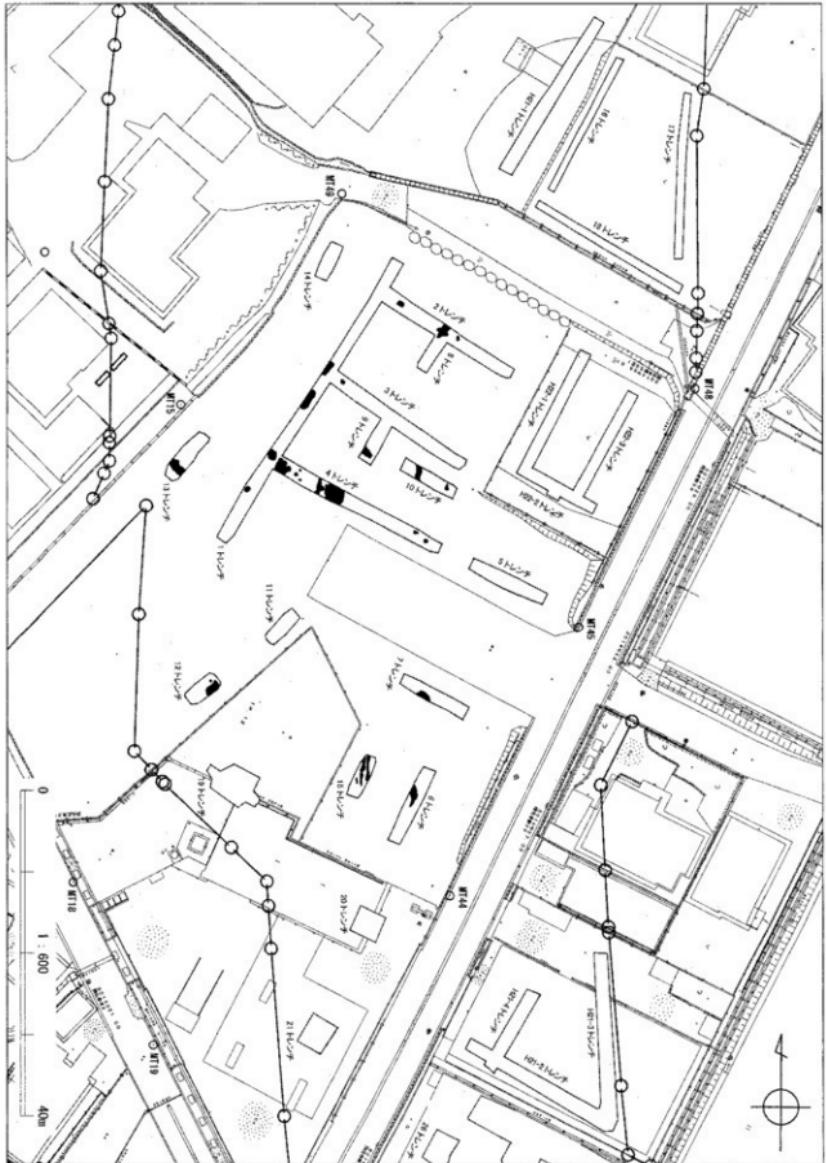
遺物は、古代に帰属するものが多数を占める。古代の遺物は、包含層内・遺構内等で出土し、須恵器、土師器のほか灰釉陶器などが出土した。中世の遺物は希薄であり、いずれも包含層より上位の耕作土や盛土中からの出土であった。図示した各遺物の出土地点は、1トレント(7・8・14・15)、2トレント(9)、3トレント(12)、4トレント(2・3・5・6・11・13・16・19)、9トレント(1・10)、12トレント(4)、14トレント(18・20・21)である。なお17については調査中に採集したものである。

1～3は須恵器蓋である。4～6は須恵器杯である。6は杯底部で、底面にはヘラ切り痕が認められる。7～10は土師器杯である。10の底部には、糸切り痕が認められる。11は灰釉陶器である。口径14.2cm、器高6.3cmを測る。12・13は土師器甕である。13は口径19.8cmを測る。体部内面に縦方向のハケメ、外面は強いロクロナデのち下半部に縦方向のヘラケズリを施す。14は土師器鍋

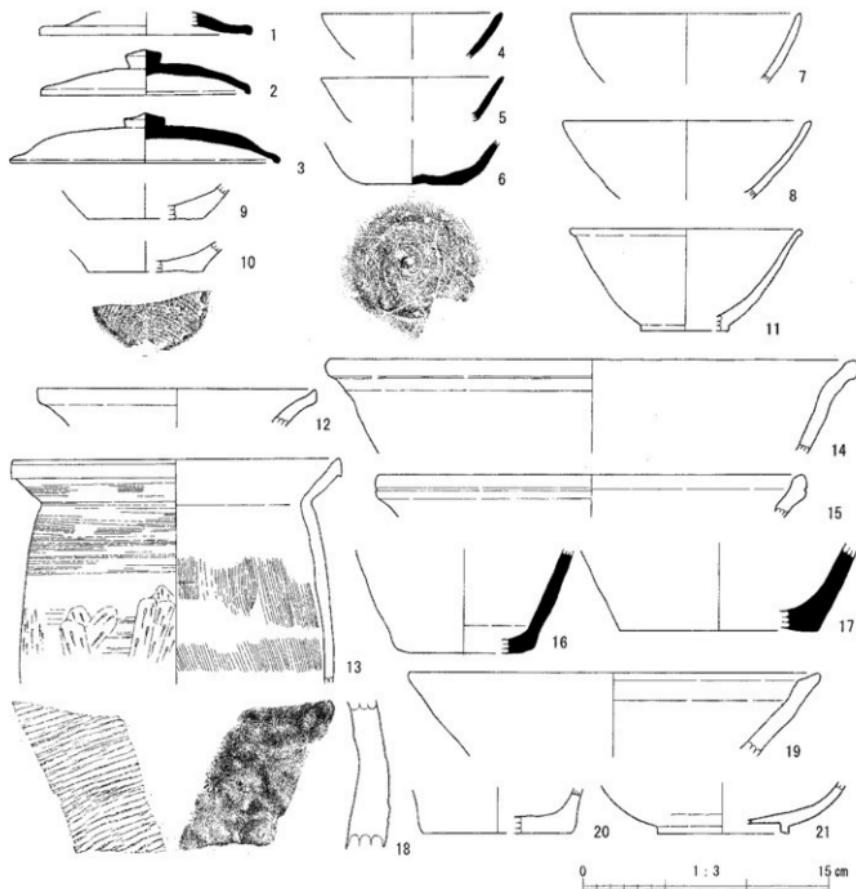
第21図 江口遺跡トレンド配置図（縮尺1：1,000）



第222図 江口遺跡遺構検出図(縮尺1:600)



で、口径32.2cmを測る。内外面とも摩滅しており、調整は不明である。16・17は須恵器壺の底部である。16は底部径6.6cm、17は12cmを測る大型品である。内外面共にロクロナデである。18は珠洲焼窯の底部である。内面ナデ、外面タキである。19は越中瀬戸焼擂鉢で、口径25cmを測る。内面の摩滅が著しく、卸目については不明である。20は越中瀬戸焼壺で、底部径9.0cmを測る。内外面ともロクロナデである。21は越中瀬戸焼碗で、口縁部を欠損する。高台部の径8.0cmを測る。内外面に釉を施す。



第23図 江口遺跡出土遺物実測図（縮尺1:3）

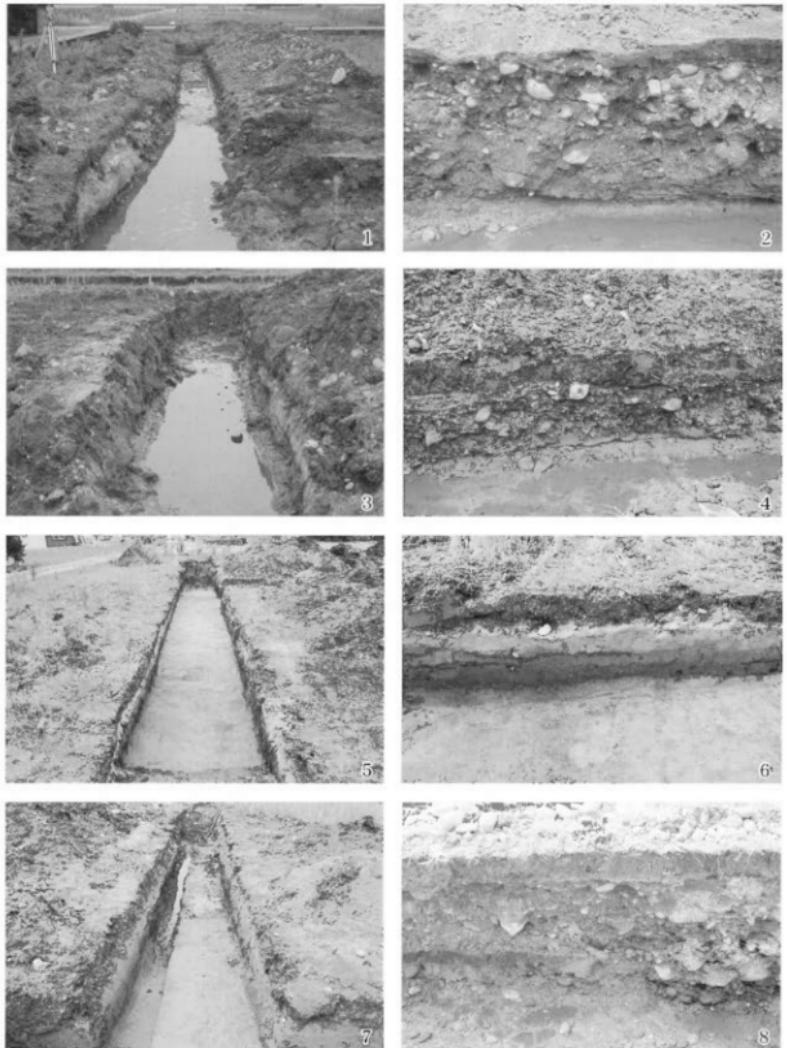
第4章 ま と め

国道8号バイパス建設に伴う埋蔵文化財包蔵地の試掘調査の結果は、以下の通りである。

遺跡名	対象面積 (m ²)	調査面積 (m ²)	遺跡の 有無	本調査対象 面積(m ²)	主な遺構	出土遺物	時代
平伝寺東遺跡	11,039	1,072	無	0	無	土師器・須恵器・珠洲焼・越中瀬戸焼	古代・中近世
浜経田遺跡	21,850	1,268	無	0	無	繩文土器・須恵器・珠洲焼・越中瀬戸焼	古代・中近世
仏田遺跡	35,213	2,247	有	16,500	竪穴住居・土坑・溝・ピット等	繩文土器・土師器・須恵器・灰釉陶器・珠洲焼・越中瀬戸焼等	繩文・古代・中近世
江口遺跡	7,177	733	有	3,890	竪穴住居・土坑・溝・ピット等	土師器・須恵器・灰釉陶器・珠洲焼・越中瀬戸焼・近世陶磁器等	古代・中近世

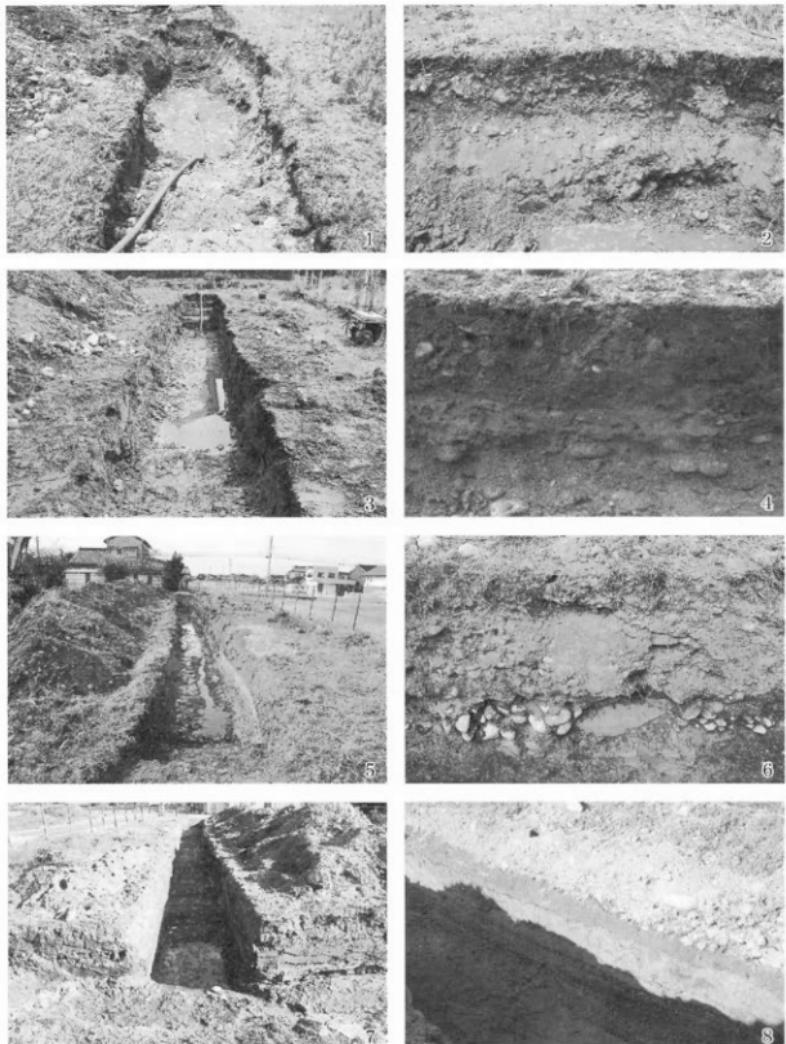
参考文献

- 魚津市教育委員会 1981 『富山県魚津市 佐伯遺跡 県道拡張に伴う緊急調査報告』
- 魚津市教育委員会 1997 『富山県魚津市山下Ⅱ遺跡発掘調査報告書』
- 魚津市教育委員会 2000 『富山県魚津市吉野遺跡発掘調査報告書』
- 魚津市史編纂委員会 1968 『魚津市史 上巻』魚津市役所
- 魚津市史編纂委員会 2012 『図説 魚津の歴史』魚津市教育委員会
- (公財)富山県文化振興財團埋蔵文化財調査事務所 2013 『仏田遺跡発掘調査報告』
- 富山県教育委員会 1979 『佐伯遺跡発掘調査概要』

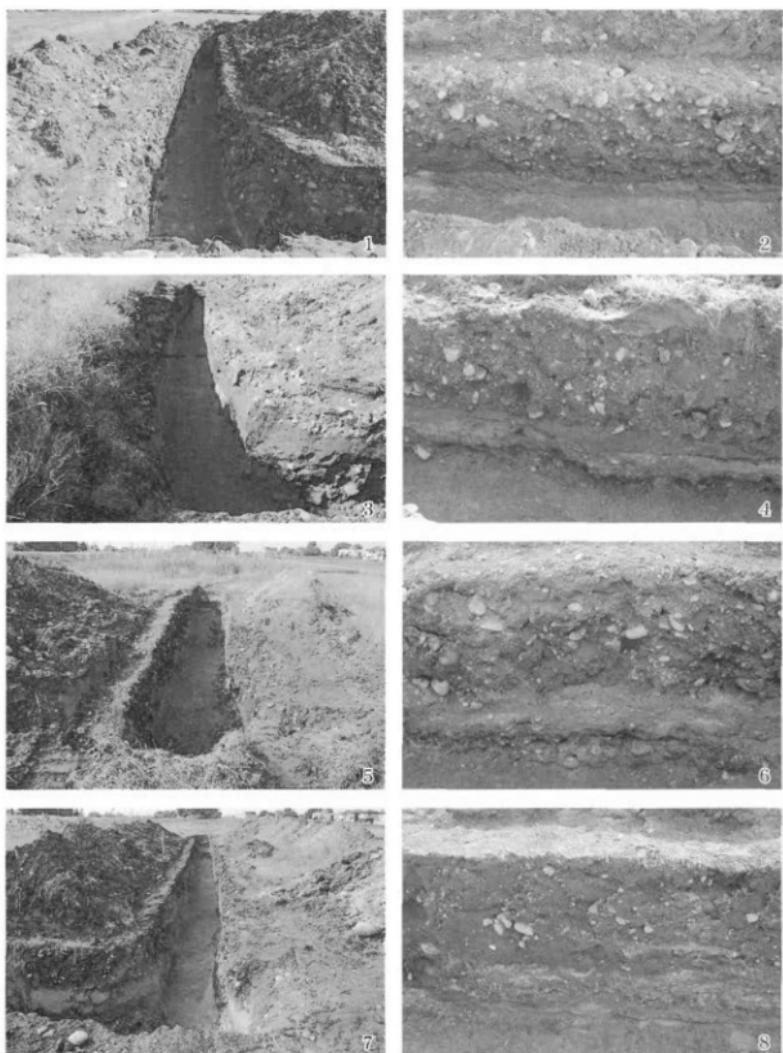


1. 6トレンチ(西から) 2. 6トレンチ土層断面(南から) 3. 7トレンチ(北から)
4. 7トレンチ土層断面(東から) 5. 15トレンチ(南から) 6. 15トレンチ土層断面(東から)
7. 16トレンチ(西から) 8. 16トレンチ土層断面(南から)

図版2
平伝寺東遺跡トレンチ2

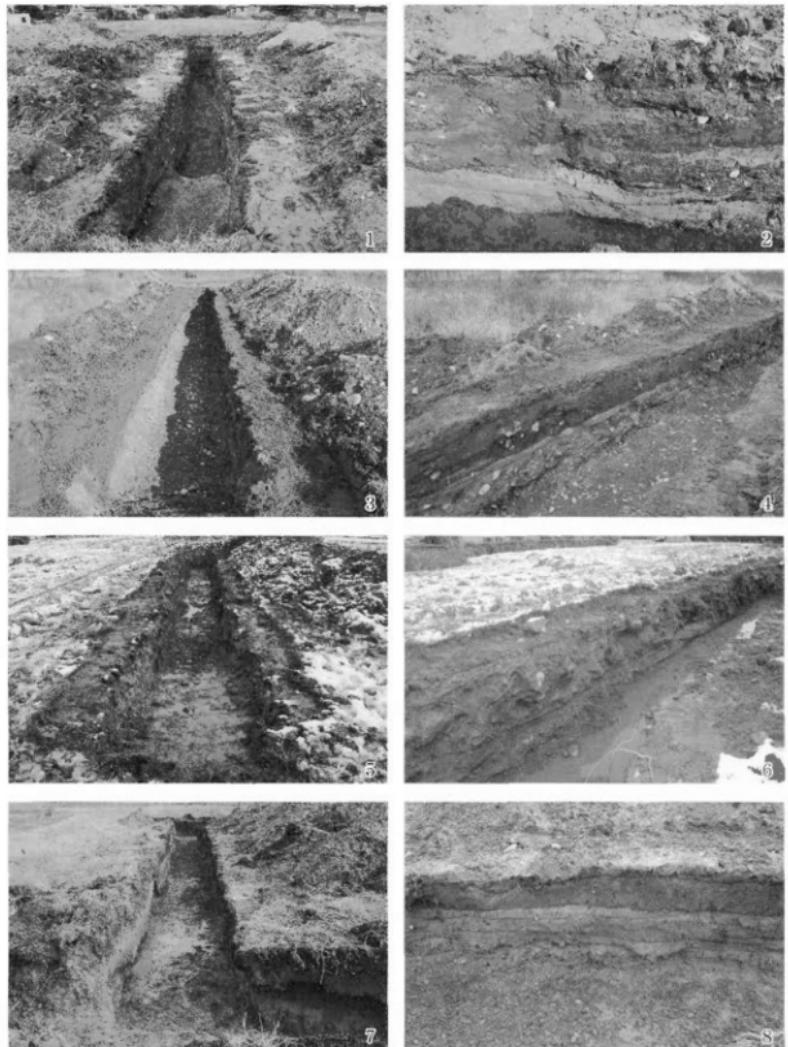


1. 17トレンチ(東から) 2. 17トレンチ上層断面(南から) 3. 20トレンチ(東から)
4. 20トレンチ上層断面(南から) 5. H21-5トレンチ(東から)
6. H21-5トレンチ土層断面(南から) 7. H21-6トレンチ(北から)
8. H21-6トレンチ土層断面(西から)

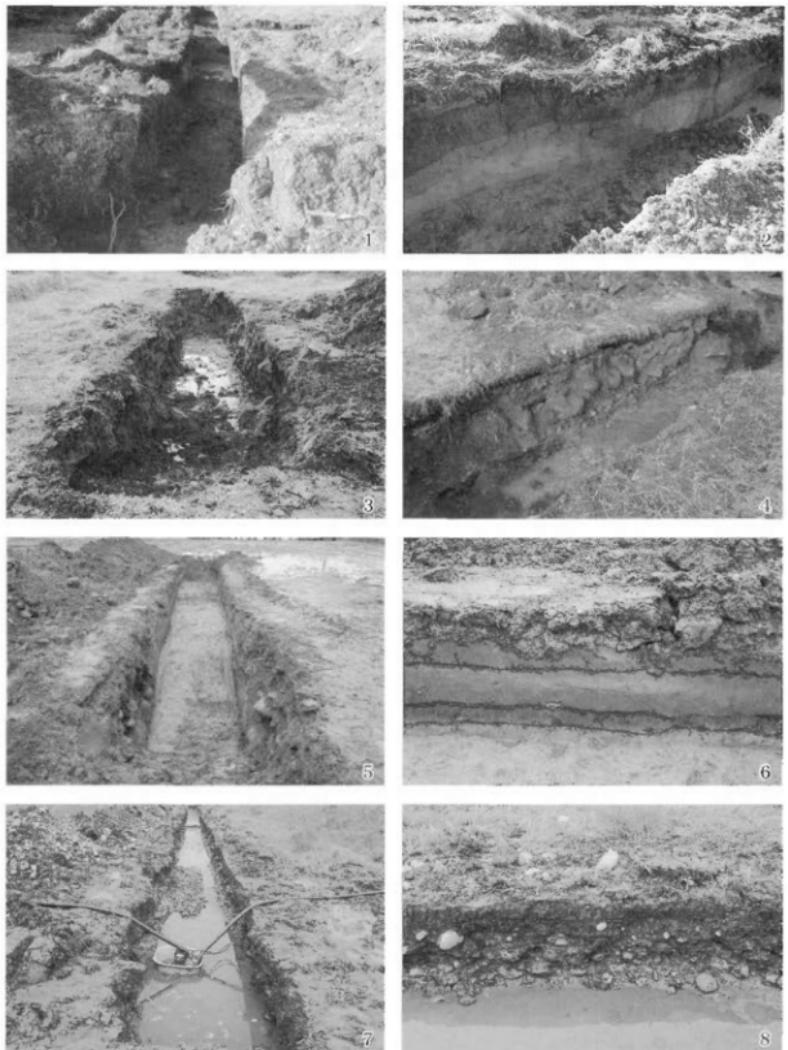


1. 7トレンチ(西から) 2. 7トレンチ土層断面(北から) 3. 8トレンチ(東から)
4. 8トレンチ土層断面(北から) 5. 10トレンチ(東から) 6. 10トレンチ土層断面(北から)
7. 11トレンチ(東から) 8. 11トレンチ土層断面(北から)

図版 4
浜経田遺跡トレンチ2

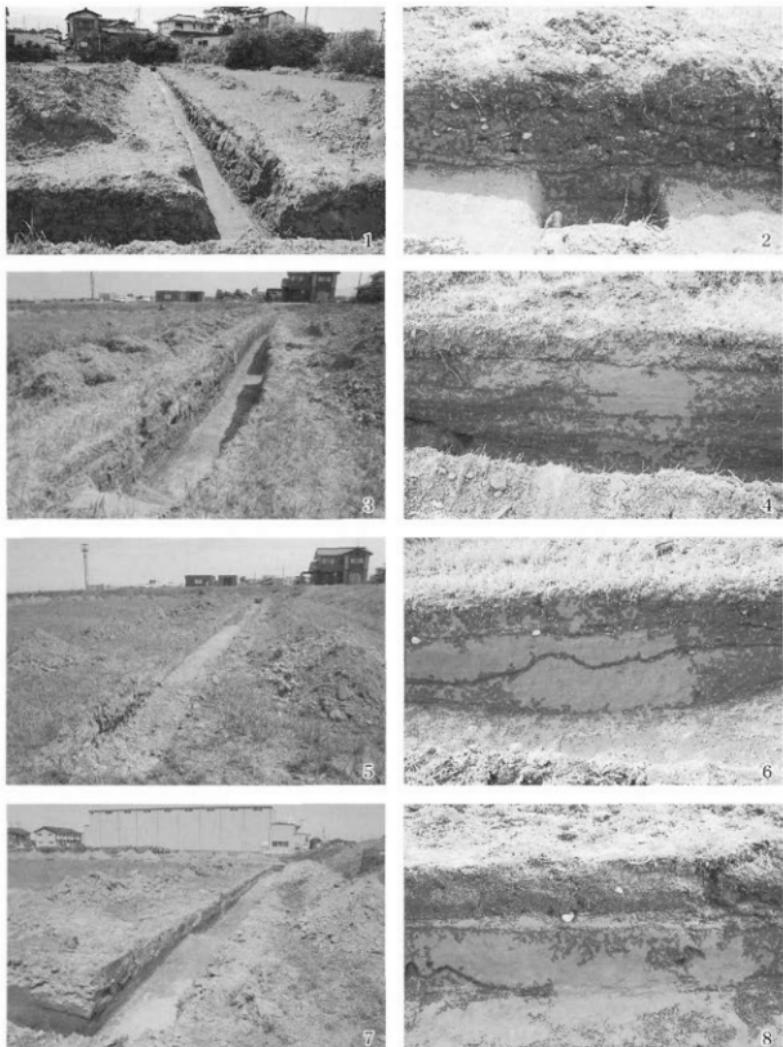


1. 20トレンチ(南から) 2. 20トレンチ土層断面(西から) 3. 27トレンチ(西から)
4. 27トレンチ土層断面(南から) 5. 32トレンチ(西から) 6. 32トレンチ土層断面(南から)
7. 42トレンチ(西から) 8. 42トレンチ土層断面(北から)

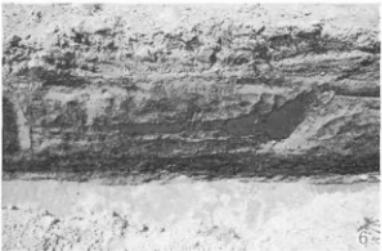


1. 43トレンチ(北から) 2. 43トレンチ土層断面(東から) 3. 44トレンチ(東から)
4. 44トレンチ土層断面(南から) 5. H21-6トレンチ(南から)
6. H21-6トレンチ土層断面(東から) 7. H22-5トレンチ(西から)
8. H22-5トレンチ土層断面(北から)

図版 6 仏田遺跡トレンチ 1

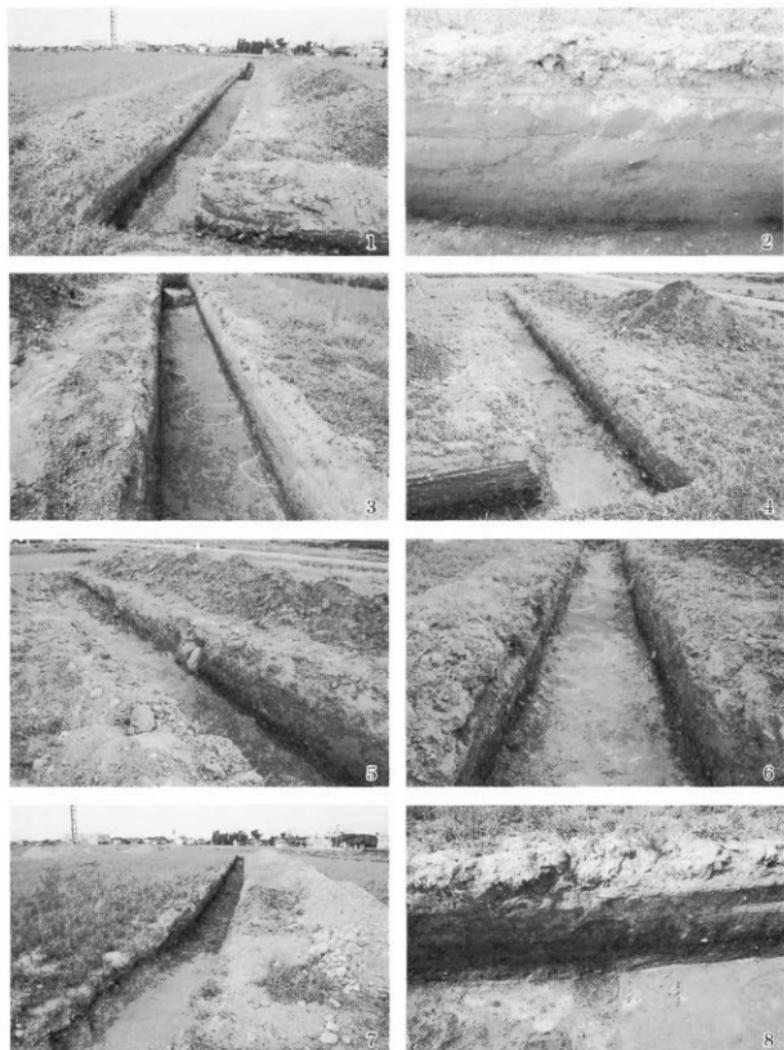


1. 1トレンチ(北から) 2. 1トレンチ土層断面(東から)
3. 2トレンチ(西から) 4. 2トレンチ土層断面(南から)
5. 4トレンチ(北から) 6. 4トレンチ土層断面(南から)
7. 5トレンチ(南から) 8. 5トレンチ土層断面(東から)



1. 9トレンチ(北から) 2. 9トレンチ土層断面(西から) 3. 9トレンチ遺構検出(北から)
4. 9トレンチ遺構検出(北から) 5. 10トレンチ(東から) 6. 10トレンチ土層断面(南から)
7. 10トレンチ遺構断面(北から) 8. 10トレンチ遺構断面(北から)

図版 8 仏田遺跡トレンチ 3



1. 12トレンチ(西から) 2. 12トレンチ土層断面(南から) 3. 12トレンチ遺構検出(東から)
4. 13トレンチ(北から) 5. 13トレンチ土層断面(西から) 6. 13トレンチ遺構検出(北から)
7. 14トレンチ(西から) 8. 14トレンチ土層断面(南から)



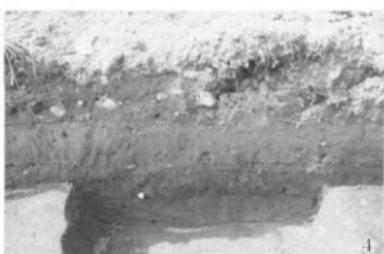
1



2



3



4



5



6

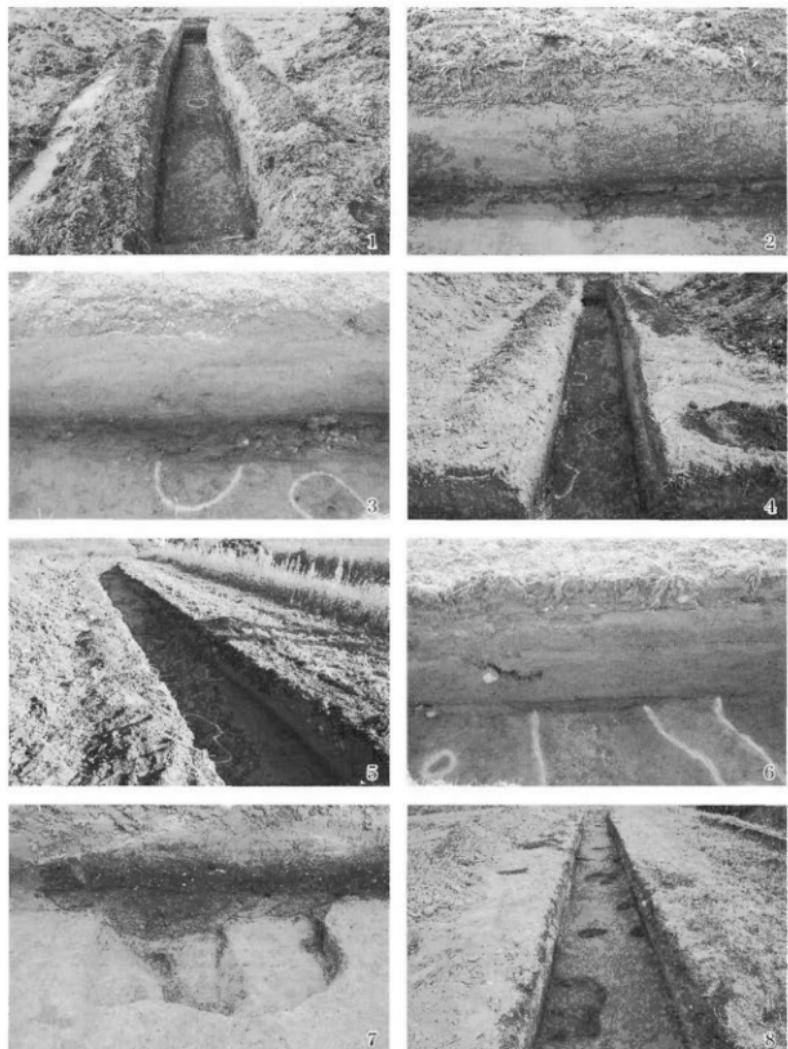


7

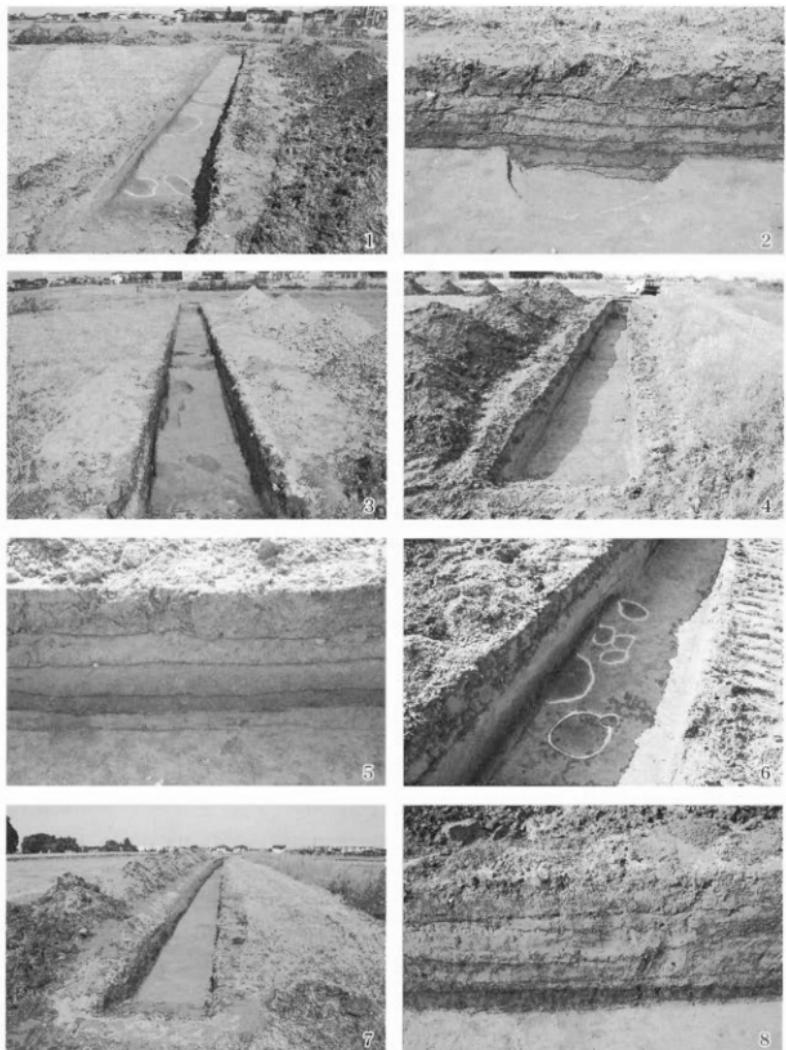


8

1. 18トレンチ(東から) 2. 18トレンチ土層断面(南から) 3. 20トレンチ(西から)
4. 20トレンチ土層断面(南から) 5. 22トレンチ(南から) 6. 22トレンチ土層断面(東から)
7. 23トレンチ(西から) 8. 23トレンチ土層断面(南から)



1. 24トレンチ(南から) 2. 24トレンチ土層断面(東から) 3. 24トレンチ土層断面(南から)
4. 24トレンチ遺構検出(北から) 5. 27トレンチ(北東から)
6. 27トレンチ土層断面(東から) 7. 27トレンチ遺構断面(西から)
8. 27トレンチ完掘(北から)



1. 28トレンチ(西から) 2. 28トレンチ土層断面(南から) 3. 28トレンチ完掘(西から)
4. 29トレンチ(南から) 5. 29トレンチ土層断面(東から) 6. 29トレンチ遺構検出(南から)
7. 30トレンチ(南から) 8. 30トレンチ土層断面



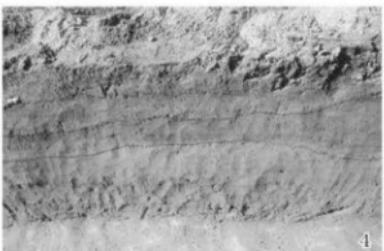
1



2



3



4



5



6

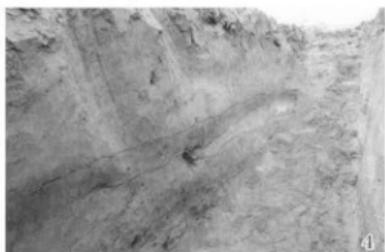


7

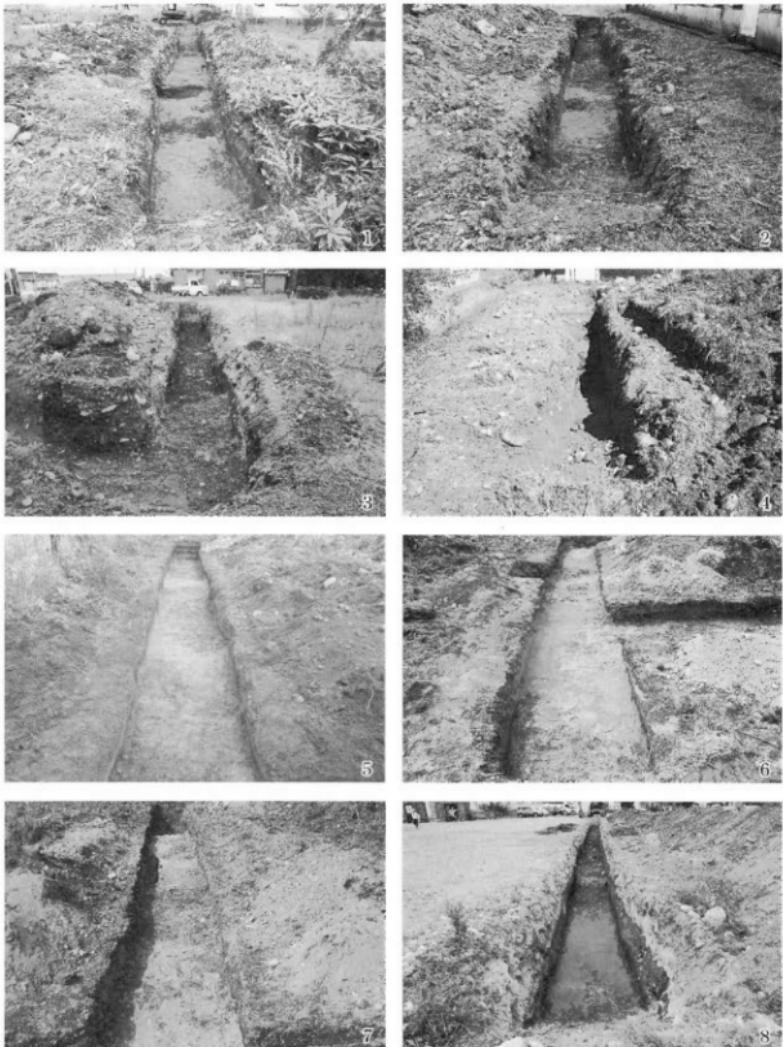


8

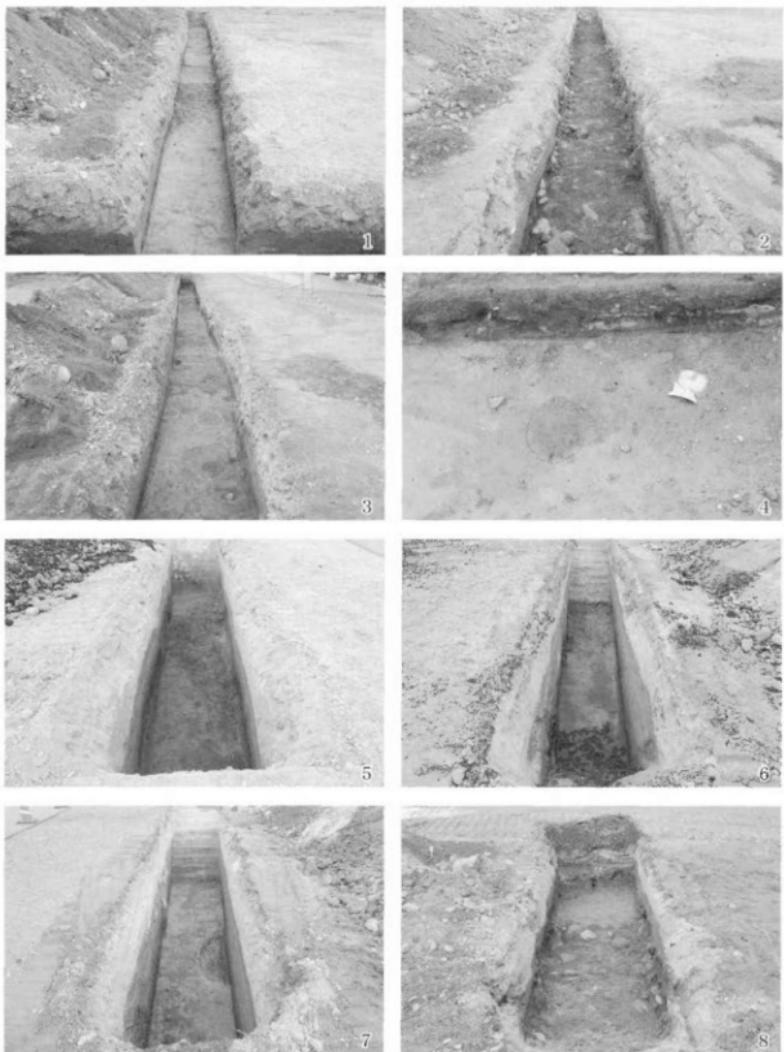
1. 39トレンチ(南から) 2. 39トレンチ土層断面(東から)
3. 45トレンチ(南から) 4. 45トレンチ土層断面(東から)
5. 47トレンチ(西から) 6. 47トレンチ土層断面(南から)
7. 49トレンチ(西から) 8. 49トレンチ土層断面(南から)



1. 50トレンチ(東から) 2. 50トレンチ土層断面(南から) 3. 51トレンチ(東から)
4. 51トレンチ土層断面(東から) 5. 52トレンチ(南から) 6. 52トレンチ土層断面(東から)
7. 53トレンチ(南から) 8. 53トレンチ土層断面(北から)



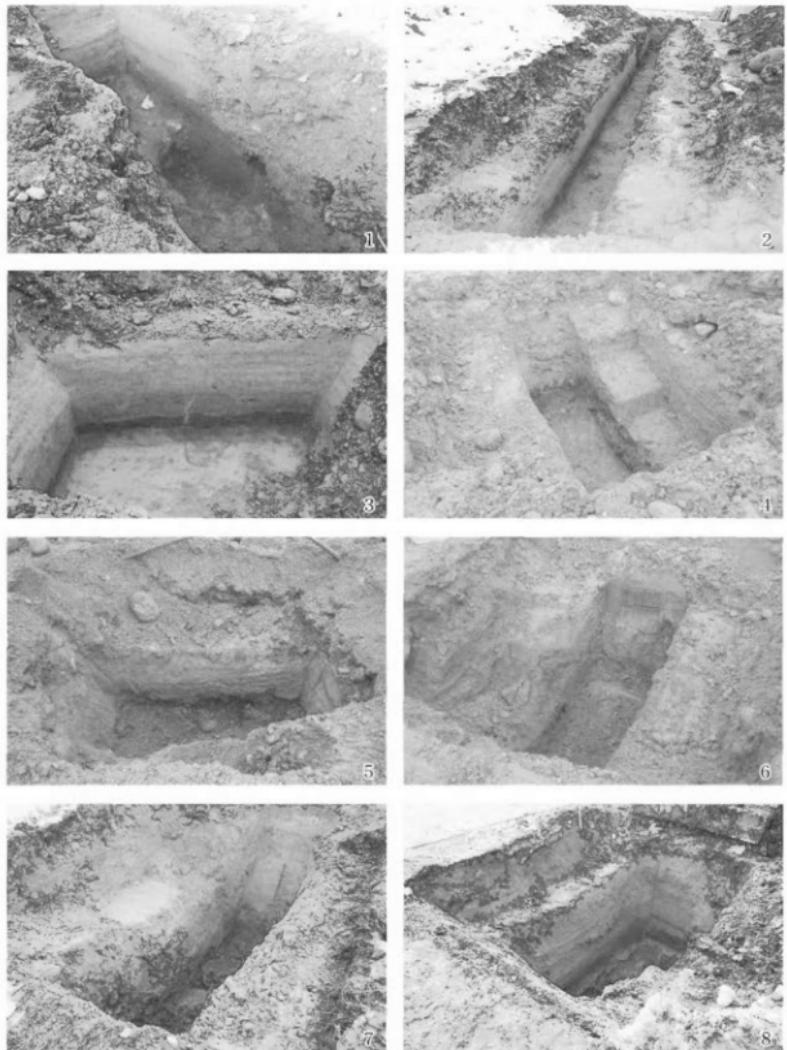
1. 21-1トレンチ(南から) 2. 21-2トレンチ(南から) 3. 21-3トレンチ(南から)
4. 21-6トレンチ(南から) 5. 22-1トレンチ(西から) 6. 22-2トレンチ(南から)
7. 22-3トレンチ(西から) 8. 23-1トレンチ(北から)



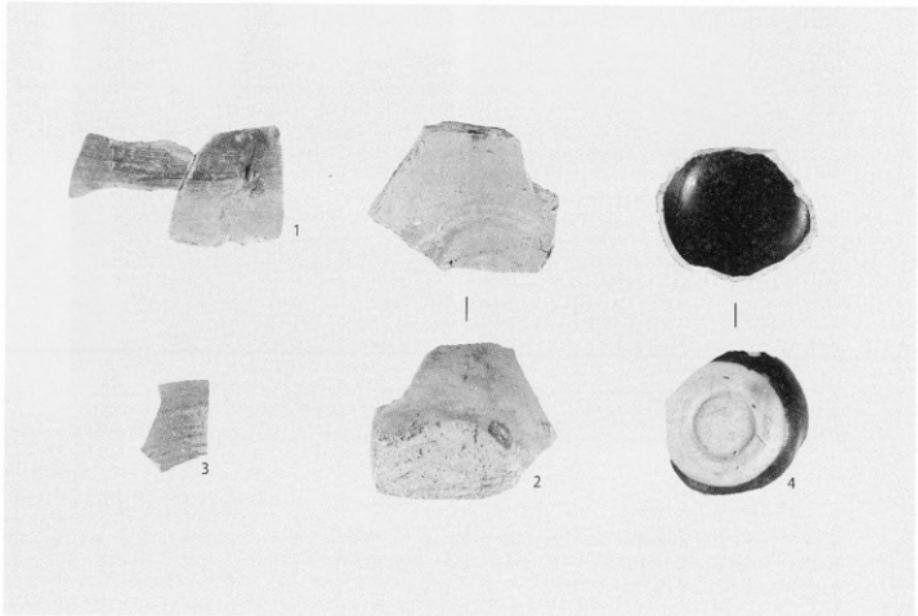
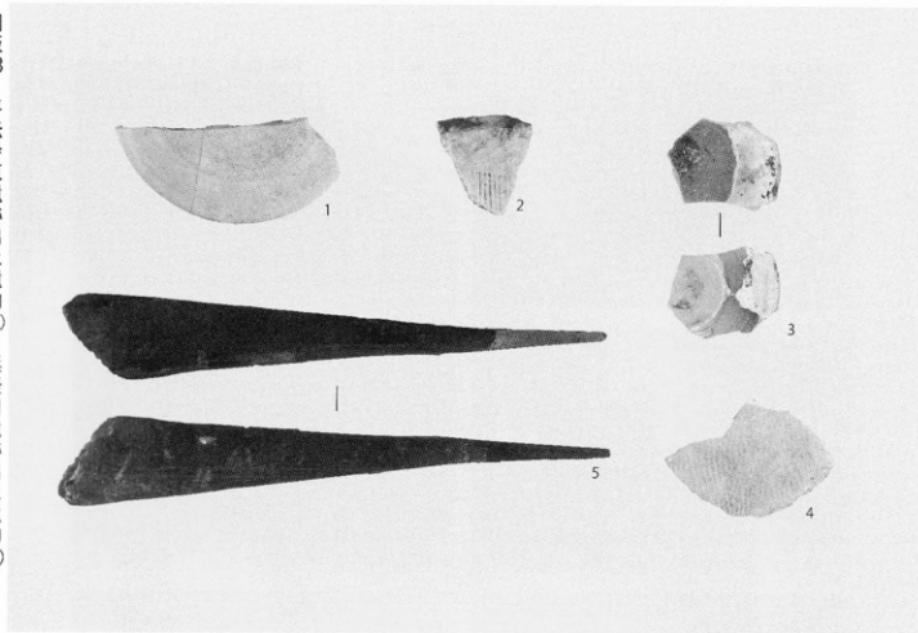
1. 23-2トレンチ(西から) 2. 23-3トレンチ(西から) 3. 23-4トレンチ(西から)
4. 23-4トレンチ遺物出土状況(北から) 5. 23-5トレンチ(西から)
6. 23-6トレンチ(北から) 7. 23-7トレンチ(西から) 8. 23-8トレンチ(南から)

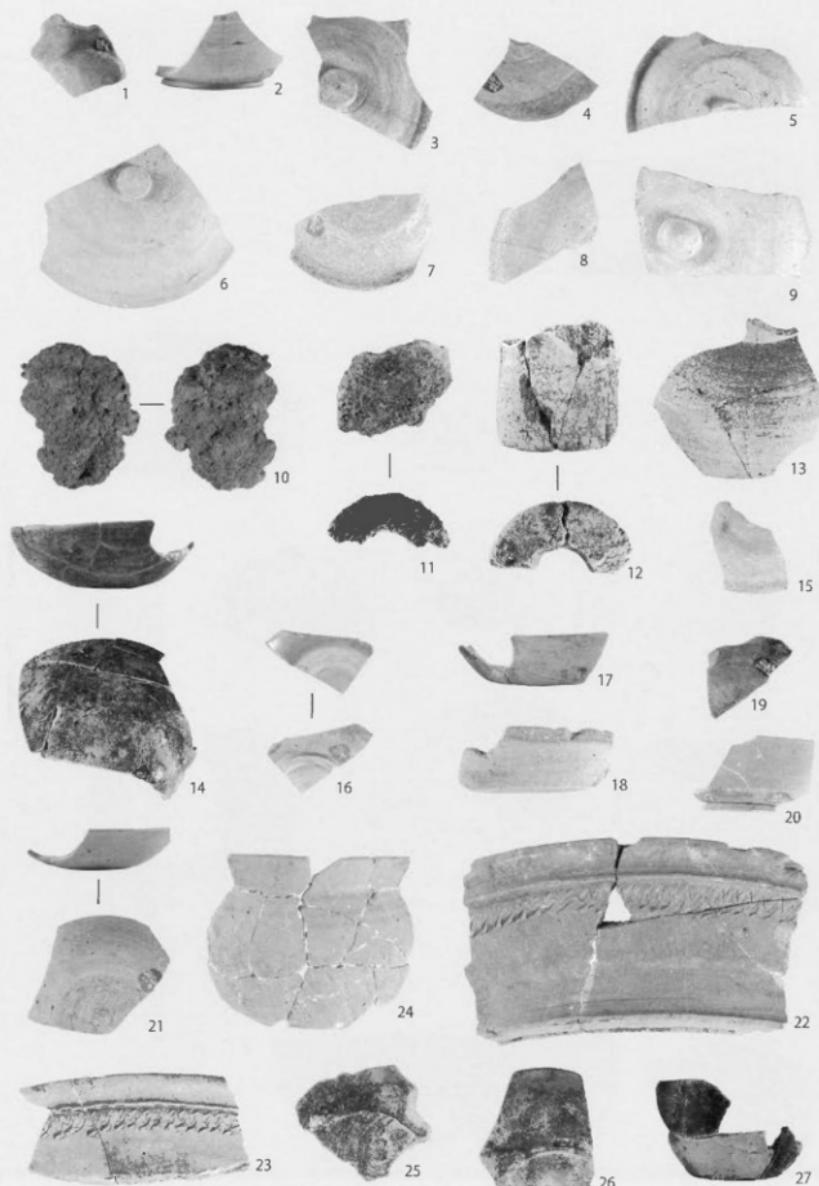


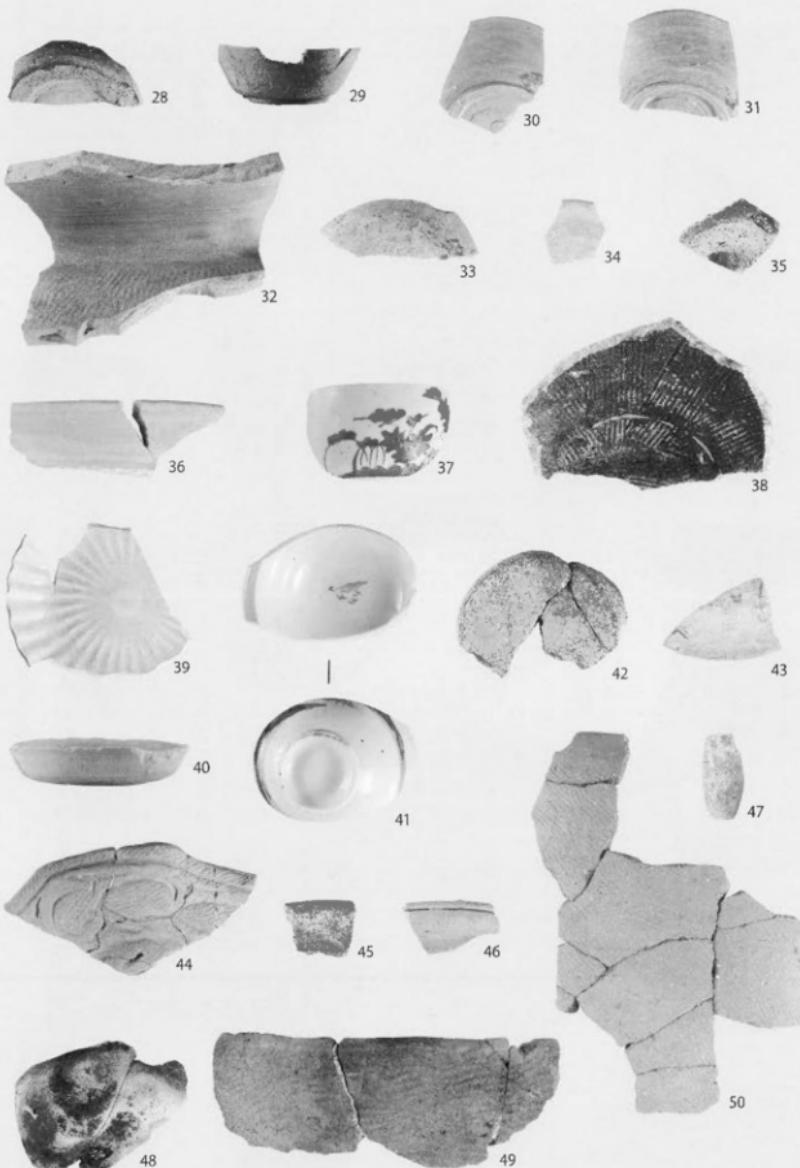
1. 23-10トレンチ(東から) 2. 23-11トレンチ(北から) 3. 23-12トレンチ(南から)
4. 23-13トレンチ(南から) 5. 23-14トレンチ(北から)
6. 23-15トレンチ遺構検出状況(南から) 7. 23-16トレンチ(北東から)
8. 23-17トレンチ(北から)

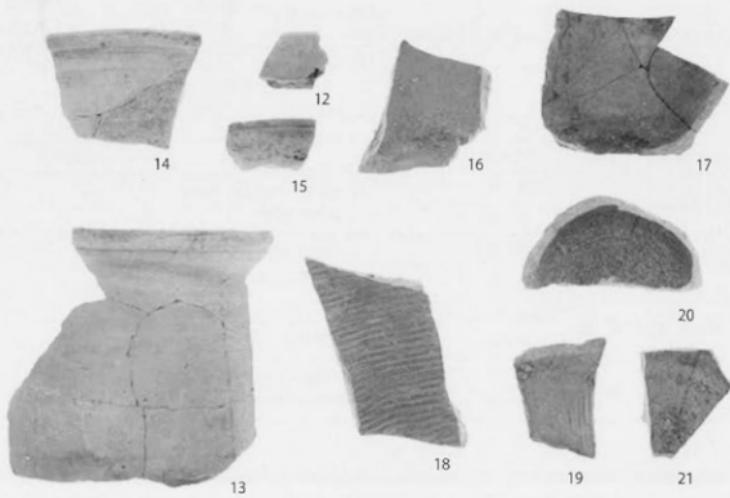
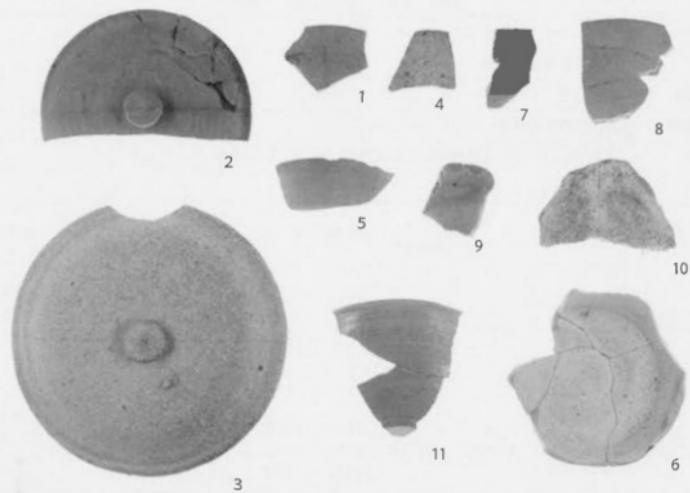


1. 23-19トレンチ(南から) 2. 23-22トレンチ(西から) 3. 23-23トレンチ(東から)
4. 23-24トレンチ(南西から) 5. 23-25トレンチ(南から)
6. 23-26トレンチ(北東から) 7. 23-27トレンチ(北東から)
8. 23-28トレンチ(北西から)









報告書抄録

ふりがな	しないいせきはっくつちょうさほうこく							
書名	市内遺跡発掘調査報告							
編著者名	的場茂見							
編集機関	魚津市教育委員会							
所在地	〒937-0066 富山県魚津市北鬼江313-2 TEL 0765-23-1045							
発行年月日	西暦2014年3月24日							
所収遺跡名	所在地	コ 一 ド		北 緯	東 經	調査期間	調査面積 (m ²)	調査原因
		市 町 村	遺跡番号					
平伝寺東遺跡	魚津市 平伝寺	16204	204115	36度 51分 00秒	137度 25分 19秒	20080701～ 20080718 20091013～ 20091023 20110301～ 20110308	1,072	入善黒部バ イバス建設 に伴う発掘 調査
浜経田遺跡	魚津市 浜経田外	16204	204116	36度 50分 45秒	137度 25分 11秒	20081014～ 20081129 20091210～ 20091228 20100517～ 20100524	1,268	入善黒部バ イバス建設 に伴う発掘 調査
仏田遺跡	魚津市 仏田	16204	204117	36度 50分 30秒	137度 25分 06秒	20070806～ 20071105 20090611～ 20090626	2,247	入善黒部バ イバス建設 に伴う発掘 調査
江口遺跡	魚津市 江口・仏田	16204	204118	36度 50分 21秒	137度 25分 06秒	20091013～ 20091023 20120620～ 20120628 20121209～ 20121216 20130124～ 20130216	733	入善黒部バ イバス建設 に伴う発掘 調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
平伝寺東遺跡	散布地	古 代 ・中近世	な し	土師器・須恵器・珠洲焼・ 越中瀬戸焼等	
浜経田遺跡	散布地	古 代 ・中近世	な し	土師器・須恵器・珠洲焼・ 越中瀬戸焼等	
仏田遺跡	集 落	縄文・古代 ・中近世	堅穴住居・土 坑・溝・ピッ ト等	縄文土器・土師器・須恵器・ 灰釉陶器・珠洲焼等	
江口遺跡	集 落	古 代 ・中近世	堅穴住居・土 坑・溝・ピッ ト等	土師器・須恵器・灰釉陶器・ 珠洲焼・越中瀬戸焼等	

富山県魚津市
市内遺跡発掘調査報告

発行日 平成26年3月24日
編集・発行 魚津市教育委員会
郵便番号 937-0066
富山県魚津市北鬼江313-2
TEL (0765) 23-1045
印 刷 魚津印刷株式会社

